

私の青春ラブコメも間違っている

アリオス@反撃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡とは別のぼっちを作ってみました。

そんだけ

目次

プロローグ1	1
プロローグ2	4
私の青春と中二病	11
中二病とライトノベルとその感想	15
体育と戸塚の相談	25
戸塚と筋トレと早川千尋	29
壁打ちと三浦と早川と由比ヶ浜	34
試合とラリーと選手交代	40
雪ノ下と比企谷の決着	46
テニス後の奉仕部部室	51
職場見学と八幡のメール	55
白猫と進路と女子三人の勉強会	61
勉強会と小町	66
闇の時間と剣豪將軍とラーメン	70
葉山の悩みとチェーンメール	75
海老名さんとBLと友達の友達	80
テスト期間と川崎沙希の行方	84
雪乃と結衣と千尋とメイドさん	87
葉山と玉砕と大人しめ	93
早川と川崎とフォロー	101
平塚先生とバトルロイヤルと人員補充	108
八幡と戸塚と千尋とどっか遊びに	114
戸塚と八幡と千尋と材木座とプリクラ	117
比企谷兄妹と千尋と東京わんにゃんショー	123

小動物コーナーと四人

127

結衣と千尋と相談事

130

奉仕部と材木座とゲームと煽り

135

雪乃とゲームと千尋と荒れ

139

プロローグ1

「ひーらつかせんせい♪」

1人の女子生徒、早川千尋が職員室で、アラサー教師に声をかけた。「どうした?」

「暇です。構ってください」

「バカ言え……私は暇じゃない。というか、教師を暇潰しに誘おうとするな」

「えーだって先生も彼氏いないし暇でしょ?」

言った瞬間、メキメキキツと千尋にアイアンクローが炸裂する。

「そうだな、お前と比企谷は体罰ではなく手を出せるから、本当にありがたい」

「いだだだ!というか比企谷って誰?」

聞かれると、パツと手を離す平塚先生。

「1人の男子生徒だ。奴も私の事を未婚だの生き遅れだのバカにしおって……」

「大丈夫ですよー。平塚先生可愛いからすぐ結婚できますって」

「……もう可愛いと言われるような歳ではないんだが……いや、基本的には褒められている!私は可愛いのか?」

「はい。たまーに煙草くせえけど可愛いですよ!」

「……………」

「ああああ!頭メキメキ言って……!お、女の子に何て事するんですかー!」

「女の子に何て事言うんだお前は」

「もう女の子って歳じゃ……いやいやいや嘘です!先生は女の子ですー!」

「うむ、よろしい」

満足げに手を離す平塚先生。

「というか、ここ職員室ですよお?少しは遠慮してくれてもいいじゃないですかあ……」

「遠慮なく人の心を抉る奴に言われたくないな」

そう言われてしまえば、千尋も黙るしかない。

「というか、最近の女子高生として教師の元へ遊びに来るといのはどうなんだ？友達はいないのか？」

「いやいや、相談ですよそーだん。生徒の悩み解決するのも先生の役目でしょ？」

「いや、そうは言われてもな……ああ、そういう事なら適任の奴らがいるぞ」

「はい？」

「特別棟に奉仕部の部室がある。悩みがあるならそこで聞いてもらえ」

×××

特別棟。そのどっかの教室の前。千尋はそこで軽く深呼吸した。で、コンコンとノックをする。

「どうぞ」

落ち着いた声が聞こえてきたので、「失礼します」と言いながら入室した。中には胸のない黒髪の女の子と、目の腐った黒髪の男の子と、胸のある茶髪の女の子がいた。

「……どなたかしら？」

黒髪の……というか雪ノ下でいいや。雪乃が聞いた。

「あー、2―Cの早川千尋です」

「なんだ雪ノ下、お前が把握してない生徒がいるのんて珍しいな」

黒髪の比企谷八幡が言った。

「別に私は全生徒を把握してるわけではないわ。あなたの事だっけ知らなかったもの。ひ、ひき……ヒキガエルくんだったかしら？」

「おい、人を両生類扱いするのやめろ。というか、なんで俺の中学の時のあだ名知ってるんだよ」

「あ、えーっと、私高2で転校して来たから、じゃないかな？」

なんとなくフオローしてしまった。

「それなら、自己紹介が必要ね。私は2―Jの雪ノ下雪乃、この奉仕部

の部長よ」

その後、八幡と結衣の「どっちが先に言う？」みたいな目線のやり取りのあと、結衣が言った。

「あ、あたしは2―Fの由比ヶ浜結衣！よろしくね」

で、最後に八幡が口を開いた。

「あー、俺は……」

「それで、なんの御用かしら？」

自己紹介を中断された。

「あーえっと、平塚先生に悩みがあるならここって言われて来たんだけど……」

「またあの人が……」

八幡がため息をつく。

「その悩みというのは？」

雪乃が尋ねた。

「えーっと、靴無くなっちゃったみたいで……」

「はっ？」

「確かに下駄箱に入れたはずんだけど……それで、一緒に探してもらえないかな？」

「ねえ、それって……」

結衣が嫌そうな顔をした。八幡も雪乃も暗い顔を浮かべる。

「虐め、ね」

「うん、多分ね」

「……気付いていたの？」

あつさりと賛同した千尋に怪訝な顔を浮かべる雪乃。

「まあ、靴を隠したり教科書に接着剤付けたりしてる時点でねえ。あんま気にしてないから、みんなも気にしないで。でも、靴はないと困るから、探すの手伝ってくれないかな？」

「……わかったわ。まずは昇降口から探しましょう。先に行つてくれるかしら？」

「あーい」

先に千尋は部室を出た。

プロローグ2

「それで、早川さんの件なのだけれど、どう思う?」

先に千尋に行かせたあと、雪乃は2人に聞いた。

「虐めだな」

「虐めだよね」

「……見解の一致ね」

ふう……とため息をついた。

「まさかとは思ったが、この学校にもあるんだな。もう少し頭のいい連中だと思ってたが」

「頭の良さなんて関係ないわ。どんなに頭が良くても、ダメな人間はダメなのよ」

「おい、こつち見て言うのやめろ」

いや、まあ合ってるんだけどさ、と頭の中で付け加える八幡。

「問題は、本人が本気でそれほど気にしてないという所だな」

「へっ?自分が虐められてるのに気にしてないの?ありえなくない?」

「それがそんなに気にしてるように見えないんだよな……」

「あーもしかしてアレじゃん?ま、マゾ……ドMって奴!」

「マゾヒズムよ。比企谷くん、異性の性癖を憶測で言うのは犯罪よ」

「何故俺……というか犯罪なのかそれ?」

八幡が言うが、雪乃は鮮やかに無視して言った。

「とにかく、ただ靴を探すだけでは意味ないわね。イジメの犯人を突き止めるなりなんなりしないと、彼女の物が失くなる度にここに来る羽目になるわ」

「……平塚先生に言えば解決するんじゃないの?」

結衣が純粹な目で聞いた。

「悪化するだけだろ。表面だけ良い子ぶるのはリア充の特技の一つだろ」

「うわー……嫌な言い方……」

「比企谷くんの意見を認めるのは癪だけど、その通りね」

「癪なのかよ……」

「じゃあどうするの?」

「それをこれから考えるのよ。とりあえず、一緒に靴を探しながらさりげなく話を聞いてみるしかないわね」

「と、言っても誰がその役をやるんだ?俺は無理だぞ」

「言わなくてもわかってるわ。静かにしててもらえる?」

「お前に言われたくないんだけど」

すると、2人は結衣を見た。

「……えっ?」

「出番だぞ、由比ヶ浜」

「そうね。あなたにお願いするしかないわ」

「えっ?あ、あたし?」

「いい由比ヶ浜さん?これはとてもデリケートな問題だから、なるべくさりげなく聞いて来てくれるかしら?」

「で、でりばーど……?よ、よくわからないけど頑張るよ、ゆきのん!」
「全然任せていい気がしないんだが……はこびやポケモンじゃねえぞ」

そう呟く八幡だが、確かにこの面子の中でまともなコミュニケーションを取れるのは結衣だけだ。

「では、行きましようか。あんまり待たせては悪いし」

雪乃の台詞で三人は昇降口へ向かった。

×××

そんなわけで、4人は靴探しを開始した。

「では、私は外を探すわ。三人はこの昇降口を探してもらえるかしら?」

「えっ?雪ノ下さん1人で中を探すの?大変じゃない?」

千尋が声をかけるも、雪乃は首を横に振った。

「いいえ。少し見て回るだけだし、問題ないわ。外にもなければ、4人で室内を探しましょう」

要約すると、結衣が千尋の話を聞き、もしものためのフォローとして八幡を配置、大体話を聞いたら室内で四人で話し合いましたよ、という事だ。

その目論見通り、結衣は千尋の横に行き、八幡は少し離れていた所で探す。

「うーん……ないねー……」

「ねえ、早川さん。ひよつとして虐められてるんだよね？」

思わず頭を壁に打ち付ける八幡。

(ストレート過ぎだろ！デリカシーをへその緒と一緒に切り落としたのかあいつ!!?)

「き、急にどうしたの……?」

当然の反応をする千尋。

「いや、さつき言ってたこと、少し気になってさ……」

「気にしなくていいよ?」

「そう言われても……気になるよ」

「別に、私はどうにかして欲しいなんて思っていないし、周りの人がどうにかしてくれるとも思っていないもん。そもそも、他のクラスの人はどうにか出来る問題じゃないんだ」

「どういうこと?」

「うちのクラスには、女子の中で誰か1人が虐められるみたいな風習がある、というより本能?的に?みたいなの?」

「……ああ。少し、分かるかも」

近くで聞いていた八幡も思わず頷いた。

「……どこにでもあるのね、そういうの」

「うおっ!」

「静かに。気付かれるわよ」

「……お前なんているんだよ」

「虐めをするような連中がわざわざ外に隠すなんて面倒なことするはずないでしょ。部活中の生徒に見つかるリスクもあるし。わざわざ、あなたの盗聴に協力しにきてあげたのよ」

「その方がよっぽど犯罪じゃねえか……」

2人に気付かず、結衣と千尋は話を進める。

「それで、今は早川さんが……」

「うん。それに、私を虐める風習がなくなったら、別の他の人が虐められるでしょう。それくらいなら、私がやられた方がいいじゃん」

「そ、それでいいの?」

「うん。このくらいどーって事ないよ」

ニコツと微笑む千尋。それに結衣は苦笑いで返すしかなかった。

「……あまり良い方法とは呼べないわね」

「まあ、現実的な防ぎ方ではあると思うけどな」

「……でも、何の解決にもなっていないわ」

雪乃と八幡は隠れながら呟いた。すると、「あつ」と千尋が呟いた。何事かと思ったら、靴が見つかった。

「……あつた」

ゴミ箱の中に入っていた。

「うわあ……」

「由比ヶ浜さんがそんな顔する事ないよ。それより、比企谷くんと雪ノ下さんに見つかったって報告しよう」

「うん……そだね」

2人は八幡と雪乃の所に合流した。

×××

千尋が帰ったあと、三人は再び部室でミーティング（仮）。

「……というわけなんだけど」

「聞いてたから分かるわよ」

「聞いてたの!?」

結衣が驚きの声を上げるが、雪乃も八幡も無視した。

「……それで、どうしよつか」

「虐めをしてる連中にハッキリ言って叩き潰すしかないわね」
「叩き潰しちゃうのかよ……」

過激なことを言う雪乃にドン引きしながら八幡は呟いた。

「じゃあ他に手はあるの?」

「あるにはある。だが、早川さんと由比ヶ浜次第でリスクも出るし、ハードルも高いから、正直人任せ感があるからいい方法とは言えないな」

「由比ヶ浜さん任せとなると、余りいい方法ではないわね……」

「ゆきのん酷くない!?」

うわあんと絶望的な声を上げる結衣を「それで、比企谷くん」と鮮やかに無視して雪乃は聞いた。

「それで、どういう方法を取るの?」

「それは……」

×××

翌日の昼休み。C組で千尋はいつものように1人で弁当を広げた。周りで嘲笑を浮かべる女子生徒の視線を、気にもせず食べようとすると、ツンツンと肩を突かれた。

「?」

「やっほー。ちーちゃん」

結衣が立っていた。

「由比ヶ浜さん……?」

「一緒にお昼食べない?」

「……………へっ?」

「ほら、うちのクラスで。いいからおいでよ!」

無理矢理、結衣は千尋の手を引いて、F組の教室まで連れて来た。

「優美子ー!」

「あ、おせーし結衣ー」

結衣の連れて来た先には、優美子の他に海老名さんに葉山、戸部、大岡、大和といういつもの面子。

「連れて来たよー」

「その子が早川サン?」

「うん」

未だ状況が飲み込めない千尋は結衣に耳打ちした。

「……………どういふこと？」

「ん？ほら、友達いないんでしょ？だったらあたし達と友達にならないかなーって？」

そう言われてしまえば、「いいえ」とは断りづらい。つまり、八幡の計画は三浦や葉山の傘下に入れてしまえばいいというものだった。

当然、C組のメンバーから良い印象は持たれないだろうが、三浦がいれば威嚇に出来るし、葉山の友達を虐めれば、みんなのアイドル葉山さんに嫌われるというデメリットを負うことになる。

八幡が自分の計画の完璧さに思わずほくそ笑んでると、千尋と目が合った。すごい睨まれていた。

×××

放課後。いつものように奉仕部のメンバーはダラダラしていると、ガララッ！と、勢いよく扉が開かれた。

「「ツッ!?」」

三人ともビクツツと肩が震え上がるが（特に雪乃は激しく）、そんなの気にもせずのっしのっしと千尋は八幡の前に歩いた。

「いきなり由比ヶ浜さんを私のクラスに来させたのは比企谷くんだよね？」

「そ、そうですけど？」

ビビりまくって敬語になる八幡。

「どうして余計なことしたの!??お陰で今日はクラスの人たちに虐められなくなったよー!」

「え、虐められたかっただんですか……………」

「違うーいや違わないけど……………違うの!そしたらクラスの人たちは別の子を虐め始めるに決まってる!それが嫌だったから今まで我慢してたのに……………」

「そ、その点については大丈夫だと思うぞ……………」

「何が!??どの辺が!??どのように!??」

「虐めっ子が虐めに失敗した時、それを何処にブツけるか分かるか？」

「他の子に八つ当たり」

「悪くない答えだ」

「悪いわよ」

雪乃が口を挟んだが、無視された。

「だが、そうはならない。しばらくはネットやメールで悪口を連発するだけだ。が、それでも手は出せないし、最終的にはクラスでハブるだけで収まる。つまり、お前に対する実害はほとんど0で収まる。その代わり、クラスに友達はいなくなるけどな」

「~~~~ッ！」

悔しいことに何も言い返さなかった。しばらく歯を食いしばっていると、結衣が立ち上がって、千尋の手を握った。

「もう、無理しなくていいんだよ？」

「私、別に無理なんか……」

「虐められてて無理してない人なんて、いないよ」

「ッ」

「クラスの友達はいなくなっただかもしれないけど、その分あたしや優美子達と、たくさん思い出作ろうよ。ね？」

正面から言われて、千尋は思わず俯いた。そして、目から大粒の涙が流れた。

私の青春と中二病

翌日の放課後の職員室。

「ひーらっーかせーんせい！」

「……何の用だ。早川」

「入部届け下さい！」

「入部届け？何か部活に入るのか？今から？」

「はい！奉仕部に！」

「……何があつた」

「いやー比企谷くんに助けてもらいましたね。私も、人助けがしたいなーって」

「ふむ……まあ生徒が進んで部活に入るのは私は止められんさ。ほら、これだ」

「ありがとうございますーす、これ誰に出せばいいですか？」

「雪ノ下か私に出してくれればいい」

「りよーかいです。じゃあこれ私からお返し」

「ん、なんだ？」

言いながら千尋は婚姻届を渡した。

「早く結婚しなよ♪」

「余計なお世話だ☆」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

明るい口調でアイアンクローを決めて来たので、とりあえず全力で謝った。

×××

で、周りより一足遅れて部室へ向かうと、なんか騒がしい声が聞こえた。

「ムハハハ、とんと失念しておった。時に八幡よ。奉仕部とはここでいいのか？」

聞き覚えのある声に、部室の中を覗くと同じクラスの材木座義輝が

いた。

「こんにちはー」

「あ、ちーちゃんー！」

結衣が千尋の元へ駆け寄った。と、思ったら背中に隠れた。

「結衣？どしたの？」

「ちよつと……」

結衣の嫌そうな視線の先には材木座がいる。よく見れば、雪乃も八幡も嫌そうな顔をしていた。

「あら、早川さん。何かご用？」

「えーつと、平塚先生に入部届け出しに行ってたんだ。奉仕部の」

「このの？」

「うん。これからよろしくね、雪ノ下さん……いや、雪乃って呼んでもいいかな？」

「それは構わないのだけれど、それなら早速仕事をお願いしてもいいかしら？」

「ん？何？」

「アレの相手をお願い」

雪乃の視線の先にはやはり材木座がいる。

「お前……スゲエな、新入部員にサラッと面倒くさい仕事押し付けやがった……」

「押し付けたのではないわ。一任したのよ」

「それ同じだろ……」

その一任された千尋は、背中の結衣を置いて材木座に近付いた。

「えーつと、材木座くんだね？同じクラスの早川千尋です」

「……い、いかにも！我こそが剣豪將軍、材木座義輝であろう！」

名前を覚えられていて、少し嬉しかったのか、材木座の声のトーンは少し上がった。

「……………」

それを見てしばらく黙り込む千尋。しばらく悩むような顔をしたあと、決心した顔になり、バツ！と構えを取った。

「私の名は千魔の魔女……サウザンド・ウィッチ」

」
」
」

雪乃、八幡、結衣が黙り込む中、若干顔を赤らめながら千尋は続けた。

「剣豪將軍、貴様がここへ来た理由を述べよ」

すると、材木座はスツゴイ嬉しそうな顔で言った。

「ふむん、実は……貴様らに頼みがあつてやつて来た」

「つまり、我ら『峯死武』に依頼に来たと？」

「その通りだ。……ちよつとこれ拾うの手伝つてください」

素に戻つて材木座は床に散らばつてる原稿用紙を集めた。それを手伝う千尋。で、トントンと整えると、材木座はブアツ！と紙を宙に投げ捨てた。

「我は今度、とある新人賞に……」

「もう私拾わないからね」

「アツハイ」

急に素に戻られ、演出の意味をキャンセルされたものの、材木座は続けた。

「とある新人賞にこれを応募しようと思うのだが、友達がいないので感想が聞けぬ。読んでくれ」

「なんか今、とても悲しいことをさらりと言われた気がしたわ……」

頭痛を抑えるようにこめかみを抑える雪乃。

「でも感想欲しいだけなら、投稿サイトとか投稿スレに晒せばいいんじゃないの？」

八幡が言うも、材木座は眼鏡を中指で抑えながら言った。

「ふん、それは無理だ。奴らは容赦ないからな。酷評されたら我は死を選ぶぞ」

「心弱えー……」

思わず呆れる八幡。そして、ちらりと雪乃を見た。

「でも、多分投稿サイトより雪ノ下の方が容赦ないよ？」

「ふむ、構わんよ。では、よろしく頼むぞ。さらばだ！」

材木座はシュバツ！と口で言いながら去って行った。静かになった部屋で、雪乃、八幡、結衣は千尋を見た。千尋は顔をじわじわと真っ赤にして手で抑え、しやがみ込んだ。

「……………もう、お嫁に行けない」

「お前……………材木座と話をするためにわざわざあんなことしたのか？」

「仕方ないじゃん！中二の相手をするには自分が中二になるのが手っ取り早いかなーって思ったんだもん！」

「だからっってお前……………なんだよ千魔の魔女って……………若干、自分の名前と掛けるし……………」

「言わないで！」

「だ、大丈夫だよーちゃん！あたしはちゃんと分かってるから！」

話に入った結衣の方をガバツと見る千尋。

「何を!?？今ので何を分かったの!?？」

「そ、それは……………ち、ちーちゃんとアレが同類だってことを……………」

「うわあああん！」

膝を抱えて悲鳴を上げた。

「お前、トドメ刺してんじゃねえよ……………」

「あ、あは……………」

八幡に言われて頬を搔いて目を逸らす結衣。今度は雪乃が千尋の肩に手を置いた。

「泣かないで、あなたは頑張ったわ早川さん」

「雪乃……………」

「だからこれからはサウザンド・ウィッチさんと呼ばせてくれるかしら？」

「いっそ殺してええええええ！」

余計に泣き出した。

中二病とライトノベルとその感想

「じゃ、帰ろっか」

4人は材木座から受け取った原稿をそれぞれ持ち帰り、家で読み返すことになった。

「あたしバスだから」

「私は電車」

「私チャリ」

「俺も」

結衣と雪乃と別れ、八幡と千尋は自転車を取りに行った。

「比企谷、途中まで一緒に帰ろ？」

「お、おう」

「？ 何を緊張してるの？」

「いや、別にしてない」

「そう？ まあこれから同じ部活でやっていくんだし、仲良くしようよ」

「お、おう……」

微笑まれて八幡は目を逸らす。

「さて、じゃあ帰ろうか」

2人は自転車に跨りながら家に向かう。偶然にも同じ方向だった。

「比企谷は好き物とかあるの？」

「……あーそうだな。MAXコーヒーとかだな」

「うえー……甘ったるい奴じゃん……」

「バツカお前あの甘さがいいんだよ」

「BOSSのところけるカフェオレのが好きだなー」

「はっ、あんな偽MAXコーヒーを好きなんてわかってねえな」

「そう？ 美味しければなんでも良くない？」

「いや、まあ確かにその通りなんだけど……というか早川も甘党なんだな」

「え？ うん。甘いものがないと生きていけないんだよね。あと去年は糖尿寸前だった」

「ダメじゃねえか……」

「好きな物食べて死ぬるんなら本望！」

「アホなことを大声で叫ぶな。一緒にいるこつちが恥ずかしい」

「……………それ、少し前にクラスの子に言われた台詞と酷似してるからやめて……………」

「……………すまん」

そのまま2人で帰宅。

「あ、私ここ家だから。またね」

「えっ」

「えっ？」

「隣、俺ん家」

「えっ」

「……………」

「……………」

「……………」

「こ、これから宜しくお願いします」

「こ、こちらこそ……………」

2人はお互いの家に入った。

×××

千尋の自室。父親は仕事、母親も、仕事。共働きという奴だ。

「さーて、材木座くんの小説はどんなのかなー」

意気揚々に読み始めたが、段々と表情が曇る。

「なんこれ……………えつと、どゆこと？」

ワケがわからなかった。何がどうなってるのか分からない。色んな意味で先が読めない展開だった。

「……………雪乃とかのアドレスもらっとけばよかった……………」

そう呟くと、原稿を持って部屋を出た。

×××

比企谷家。

「……………なんだこりゃ」

原稿を読みながら八幡はそう呟いた。すると、元氣良くドアが開かれた。

「お兄ちゃん！」

「あのね、小町ちゃん？ノックしようね？」

「お客さんだよー！」

「話聞いてた？ていうか、嫌味のつもり？俺に客なんてこないでしょ」

「いや本当に。お兄ちゃん、洗脳でもしたの？」

「してねえよ。俺のことなんだと思ってるの？」

「いいから早く」

「分かったよ……………」

八幡は緊張気味に一階に降りた。自分に客が来るなんてハレー彗星並みの頻度だからだ。

「……………あ、比企谷ー」

「……………早川。お前何しに来たの」

「ちよつと……………これのこと……………」

言いながら材木座の原稿を見せた。

「……………ああ、なるほどな。上がってくれ」

「どーもー」

許可が出て千尋は靴を脱いで八幡に続いた。すると、ピョコンと小町が飛び出てきた。

「兄がいつもお世話になってます。妹の小町です」

「あ、私は早川千尋です。ひき……………八幡くんとは同じ部活です」

「可愛い方ですね。お兄ちゃんにはもったいないです！」

「そんなことないよ。八幡くんだってカッコいい顔してるじゃん」

「……………あの、失礼ですが、千尋さんの目は節穴ですか？」

「ちよつと、小町ちゃん？どういう意味？」

後ろから八幡が声を上げる。

「兄の何処がカッコいいんですか？目がとんでもないことになってますよ……………」

「と、とんでもないことになっちゃってるの？どうなってるの俺の目？」

八幡がまた呟いた。

「うーん……目は確かにアレかもしれないけど、顔は整ってるんじゃないかな？」

(目はアレなのか……というかアレってなんなんだ？写輪眼？)

「それで、何処でやるの？」

「えっ、あーえっと……じゃあ俺の部屋でやるか」

「うん。お邪魔します」

2人は八幡の部屋へ向かった。

×××

(まさか、俺の人生で女の子を部屋の中に入れるようなことがあるとは……)

ほんのり感動しながら八幡は「適当にかけてくれ」と、言った。

「へえー……わたし、男の子の部屋に入るの初めてなんだー。意外と綺麗なんだね」

「お、おう……」 ↑緊張して上手く話せない。

「なんか面白いものないの？エロ本とか」

「ねえよ。あー飲み物何がいい？」

「へ？あ、あーえっと……いや、いいよ。ちよっと話聞きたかったただけだし」

「えっ？い、いいの？」

「えっ？やっぱいる」

「お、おう？」

「や、でも……」

話がまったく進まなかった。

「……………じゃあ、お茶で」

「了解……」

八幡は部屋を出た。で、お茶を淹れて戻って来た。

「はい、お茶」

「あ、ありがとう」

「それで、何を聞きたいって？」

「この支離滅裂な文章の事なんだけど……読んだ？」

「ああ、読んだよ。冒頭だけな」

「これ、どうすればいいの？面白いつまらない以前に完結すらしてないんだけど……」

「まあ、その辺の指摘は雪ノ下がしてくれるさ。俺たちは一通り読んで思ったことを言ってみればいいだろう」

「……………そっか。なるほど、ありがとう。帰るね」

「まさか、それを聞くためだけに来たのか？」

「うん。家が隣でよかったよ。まだ結衣と雪乃のアドレスもらってないし……。あ、丁度いいや。比企谷のアドレス教えてよ」

「えっおう」

戸惑いながらも八幡はスマホを千尋に渡した。

「わ、私が打つんだ……。勝手に中見ていい？」

「別に。見られて困るモンもないし」

「了解。……………えーっと……………」

と、自分のスマホにアドレスを入力し始める千尋。

「あ、ついでにLINEも交換していい？」

「そんなもんやってない」

「あ、そう……。ようやく公式アカウントと家族以外の友達が追加されると思っただけ……」

「お、おう。すまん……………」

気まずい沈黙。

「インストールするから貸せ」

八幡からその沈黙を破った。

「な、なんかごめんね……………」

「別にいい」

「あつ、ついでにパズドラもやろうよ！」

「ああ、そっちなら俺もやってる。ていうか、女子もパズドラってやる

のか?」

「ランク250くらいまであげたけど、クラスの子誰もやってなくてドン引きされたよ」

「お、おう……。なんか悪い」

「ううん。過去のトラウマなんて気にしてたらキリないよ」

で、LINEを登録してパズドラも登録した。

×××

翌日の昼休み。

「ちよつ、千尋。あんた顔色ヤバくない?」

飯を食ってる時に、優美子に声を掛けられた。

「うん……。昨日は夜更かししちゃって……」

「女の子が徹夜とかよくないっしょそういうの。肌とか荒れるんしよ?」

「確か、髪にもよくないって聞くよね」

海老名さんも頷きながら言った。

「1日くらい平気だよ……。親父も髪の毛もつまさきしてるし」

「そういえば、早川さんってその茶髪は染めてるの?」

葉山に聞かれた。

「ううん。地毛だよ」

「地毛え!?」

結衣が過剰に反応した。

「何それズルい!染めなくても髪の毛茶色いとか!」

「別に茶色くてもいいことないよ……。虐めの的になるだけだし……」

「へっ?いい、虐められてるの?」

海老名さんがその言葉に反応し、優美子と葉山も眉をピクツと動かした。が、当の本人は気にした様子なく欠伸をする。

「ううん。少し前にそういうことあっただけ。先生には目を付けられるし、散々だよ……」

「あ、ああ、そゆことが……」

「ビックリしたよ……」

その会話を聞きながら結衣はホッと胸を撫で下ろした。

×××

で、放課後。部室に行こうと千尋が荷物をまとめてると、目の前に材木座が立った。

「ん、何？材木座くん。これから部室行くから感想なら……」

「千魔の魔女よ」

「」

顔が真っ青になる千尋。周りも材木座が誰かと話してるのが珍しいのか、2人に注目するが、構わず材木座は続けた。

「我と契約し、政府を転覆しようではないか」

「」

「どうした？サウザンド・ウィッチ」

別称を言われて顔が青から白くなった後、赤くなる千尋。どうやら、完全に同類と見られてしまったようだ。周りの騒めきに追い討ちをかけられる。

千尋は涙目で、壁をも走れそうな勢いで、部室に逃げ込んだ。その千尋に、すでに部室にいた八幡、結衣、雪乃はビックツとしつつ視線を集めた。

「な、何？」

「お、落ち着いて入ってきてくれるかしら。サウザンド・ウィッチさん」

「それが落ち着かせるつもりのある台詞かあ！」

雪乃の台詞にビシィツ！とツツコミを入れる千尋。

「な、何かあったの……？」

引き気味の苦笑いで結衣が聞いた。

「材木座くんが私のことを教室で千魔の魔女って言っちゃったの！お陰で明日から私は虐められっ子から痛い子に……」

それに八幡は少なからず同情した。

「確かに……中学の頃は生まれつき茶髪だったし……何か能力がある気がしないでもなかったけど……今は違うもん……」

（中学の頃の引用だったのか……サウザンド・ウィッチ）

「そういうえば、クラスメイトには『略してサンドイッチ』ってバカにされてたっけなあ……」

しみじみそんな自分の黒歴史を思い出していると、材木座が一足遅れて入ってきた。

「頼もう」

そして、椅子に脚を広げて座った。

「さて、では感想を聞かせてもらおうか」

なんであれで自信満々なんだろう……と、千尋と八幡が思う中、雪乃が最初に語り始めた。

「ごめんなさい。私にはこういうのよくわからないのだけれど……」

「構わぬ。凡俗の意見も聞きたいところだったのな。好きに言ってくれたまへ」

そう、と一息つくと、雪乃は言った。

「つまらなかつた。読むのが苦痛ですらあったわ。想像を絶するつまらなさ」

「げふうっ！」

その一言を聞いた瞬間、千尋は耳を塞いで目を閉じた。聞くと材木座に全力で同情してしまうからだ。しばらく頭の中で寿限無（銀魂ver）を唱えていたが、ボタン！という耳を塞いでも聞こえてきた音に思わず目を開けた。

「な、何？？」

見れば、材木座が大の字に倒れていた。肩がビクンビクンと痙攣していて、目は白目を剥いている。

「……………雪乃、何したの？」

「率直な感想を述べただけよ。じゃあ次、由比ヶ浜さん」

「え？？あ、あたし？？」

驚きと共に結衣は材木座を見た。涙目だったので、どうにか褒める

部分を探し出し、自分の中に浮かんた言葉をそのまま発した。

「え、えーつと……。む、難しい言葉をたくさん知ってるね」

「ひでぶっ！」

「トドメ刺してんじゃねえよ……」

比企谷が結衣を引き気味に見た。

「ち、ちーちゃんお願い！」

逃げるように千尋に言った。すると、材木座は千尋にすがるような視線を向ける。同類同士、分かり合えるとも思っただろう。だが、千尋はさっきの教室での一件をまだ根に持っていた。

「自分を主人公のモデルにするの、やめたら？」

「イギヤアアアツ!!？」

さらに床を転がる。そして、その転がった先には八幡が立っていた。

「ぐ、ぐぬう。は、八幡。お前なら理解できるな？ 我の描いた世界、ライトノベルの地平がお前ならわかるな？ 愚物どもでは誰一人理解することができぬ深遠なる物語が」

「……あの2人って知り合いなの？」

その台詞を聞いて千尋は隣の結衣に聞いた。

「なんか体育でペア組んでるらしいよ」

「へえ……待って。じゃあ昨日、別に私が材木座くんの相手する必要なかったんじゃないの？」

ジロリと雪乃を睨んだが、雪乃は目をそらした。後でじっくり聞いて詰めてやると思つてると、八幡から声がした。

「で、あれって何のパクリ？」

「ぶぶっ!!??..ぶ、ぶひ……ぶひひ」

床をゴロゴロとのたうちまわり、壁に激突して動きを止める材木座。それを見ながら雪乃は八幡に言った。

「……あなた容赦ないわね。私よりよほど酷薄じゃない」

本当にその通りだと千尋が思つてると、結衣が千尋の袖を引っ張つた。

「ちよつと、何とかしてあげなよ」

「絶対に嫌。比企谷」

押し付けると、八幡は言った。

「まあ、大事なものはイラストだから。中身なんてあんまり気にすんなよ」

×××

しばらくの間、ひっひっふうーと心を落ち着かせると、材木座は立ち上がった。

「……………また、読んでくれるか」

「お前……………」

「DMなの？」

「いやそういうんじゃないでしょ」

材木座の台詞に、八幡、結衣、千尋と言った。

「お前、あんだけ言われてまだやるのかよ」

「無論だ。確かに酷評されはした。もう死んじやおつかなーどうせ生きててもモテないし友達いないし、とも思った。むしろ我以外みんな死ねと思った」

「そりやそうだよね。アレだけ言われたら私でも死にたくなるよ」

「だが、それでも嬉しかったのだ。自分が好きで書いたものを誰かに読んでもらえて、感想を言ってもらえるというのはいいものだな。……………読んでもらえるとやっぱり嬉しいよ」

それを聞いて千尋はなんとなく感動した。誰かに伝えたかったことがあから書き、それで誰かを動かさせたのなら、さらに嬉しい。その嬉しさがあるから、何度だって書きたくなる。

「ああ、読むよ」

「私も、暇だったら読む。ラノベは好きだし」

八幡と千尋はそう頷いた。すると材木座は笑顔で返した。

「また新作が書いたら持ってくる」

そう言い残して材木座は部屋から去って行った。

体育と戸塚の相談

体育の時間。3クラス合同の体育で、さらにそこから陸上とバレーに別れている。千尋はバレーを選択していたが、陸上にすれば良かったと、心底後悔していた。なぜなら、

「では、4人組を作れー」

これだ。陸上にしとけば個人種目なのでこんな事にはならなかったはず……と、後悔していた。まあ種目を選択した時はまだ友達作りたいとか思っていたし、仕方ないといえば仕方なかった。

で、案の定というかなんというか、C組の女子は千尋を残して全員組んでしまっている。また先生に言って何処かに混ぜてもらおう……と、思ってたら肩に手を置かれた。

「ちーちゃん、おいで？」

「へっ？」

結衣だった。

「あたし達、優美子と姫菜と三人だけだから組まない？」

「でも、他のクラスじゃ……」

「そんなの関係ないって優美子が……」

「あ、あく……じゃあ、混ぜてもらおっかな」

「うん、おいでおいで」

仲良くやっていた。

×××

放課後。掃除当番で少し遅れた千尋が部室に入ると、少し意外な光景が見えた。

「無理ね」

「いや無理って。お前さー」

「無理なものは無理よ」

バツサリ切り捨てる雪乃。

「何が無理なの？」

「あら、早川さん。こんにちは」

「こんにちは」

「この男が2―F組の子にテニス部に入らないか？と誘われたみたいなのよ。その場合、この奉仕部は辞めることになると思うから、その可能性をバツサリ切り捨ててあげただけ」

「えっ、比企谷。辞めちゃうの……？」

「うっ……」

少し寂しそうな顔をした千尋に八幡は少し罪悪感に追われた。

「……いや、話を聞いた限りだと辞めさせてもらえないそうだし」

「そっか。良かった」

微笑まれて、顔をそらす八幡。

(こいつの考えてることはよく分からん……)

そう思いつつも、八幡は雪乃に何か言われる前に会話を逸らした。

「戸塚のためにもなんとかテニス部強くならんもんかね」

「……珍しいこともあるのね。あなた、人の心配するような人だったかしら？」

「まあ、人に相談されたの初めてだったんで、ついな……」

八幡は頬をぽりぽりと搔いた。

「雪乃だったらどうする？」

「そうね。全員死ぬまで走らせてから死ぬまで素振り、死ぬまで練習、かな」

微笑と共に言われて、八幡も千尋も半分くらい本気で引いてると、ガラツと部室の戸が開けられた。

「やっはろー」

「やっ……えっ？」

「気にするな早川。ガハマ民族の挨拶だ」

「ちよっ、勝手に民族作るなし！」

結衣がそう言うと、後ろから1人の少年が顔を出したを

「あ……比企谷くんっ！」

「戸塚か……」

戸塚だった。戸塚はとてつと八幡の前に駆け寄ると、パアツと明るい笑顔で言った。

「比企谷くん、ここで何してるの?」

「いや、俺は部活だけど……お前こそ、なんで?」

「今日は依頼人を連れてきてあげたのよ、ふふん」

自分が聞かれたわけでもないのに、得意げに胸をそらす結衣。無駄にでかい胸を横目で見ながら、千尋はため息をついた。そんな千尋の気も知らずに結衣は得意げに言う。

「やー、ほらなんてーの?あたしも奉仕部の一員じゃん?だから、ちよつとは働こうと思ってたのよ。そしたらさいちゃんが悩んでる風だったから連れてきたの」

「由比ヶ浜さん」

「ゆきのん、お礼とかそういうの全然いいから。部員として当たり前のことしただけだから」

「由比ヶ浜さん、別にあなたは部員ではないのだけれど……」

「違うんだっ!??」

「違うのっ!??」

千尋も反応した。

「ええ。入部届をもらっていないし、顧問の承認もないから部員ではないわね」

「ちーちゃんは!??」

「ちーちゃ……早川さんからは平塚先生が預かったと聞いたわ」

「そんなあ!」

絶望的な声を上げる結衣を無視して千尋は雪乃の後ろに回った。

「ねえ、今ちーちゃんって言いかけた?言いかけたよね?」

「気の所為よ」

「呼びたかったらそう呼んでくれていいんだよ?」

「やめとけ早川。10倍返しくらいされるぞ」

八幡に止められたのでやめた。

「で、戸塚彩加くん、だったかしら?何かご用かしら?」

「あ、あの……テニスを強く、してくれる、んだよ、ね?」

途切れ途切れにそう戸塚は言った。

「由比ヶ浜さんがどんな説明をしたのかは知らないけれど、奉仕部は便利屋ではないわ。あなたの手伝いをしら自立を促すだけ。強くなるもならないもあなた次第よ」

「そう、なんだ……」

それを聞いて、「そうだったのか……」と千尋は呟いた。

「由比ヶ浜さん」

「何？」

「何、ではないわ。あなたの無責任な発言で1人の少年の淡い希望が打ち砕かれたのよ」

「ん？んんっ？でもさー、ゆきのんとヒツキーならなんとかできるでしょ？」

あつげらかんと結衣はそういった。それを聞いて、雪乃は挑戦的な笑みを浮かべた。

「……ふうん、あなたも言うようになったわね、由比ヶ浜さん。その男はともかく、私を試すような発言をするなんて」

そんなわけで、依頼を受けることになった。

戸塚と筋トレと早川千尋

翌日の昼休み。テニスコートにて、全員集まった。あとなぜか材木座もいる。

「えつと……戸塚くん、だよね？」

千尋が戸塚に声をかけた。

「う、うん」

「私、奉仕部の早川千尋。昨日は挨拶できなかったから、よろしくね」

「うん。戸塚彩加です」

と、挨拶した。それを見ながら雪乃は言った。

「では、始めましょうか」

「よ、宜しくお願ひします」

それに、戸塚が礼儀正しく一礼する。

「まず、戸塚くんに致命的に足りていない筋力を上げましょう。上腕二頭筋、三角筋、大胸筋、腹筋、腹斜筋、背筋、大腿筋、これらを総合的に鍛えるために腕立て伏せ……とりあえず死ぬ一歩手前までやってみて」

「うわあ、ゆきのん頭良さげ……え、死ぬ一歩手前？」

聞き捨てならない台詞に結衣が引つ掛かりを覚えた。

「ええ。筋肉は痛めつけた分だけそれを修復しようとするのだけけれど、その修復の際に、以前よりも強く筋繊維が結びつく、これを超回復というの。つまり、死ぬ直前までやれば一気にパワーアップ、というわけよ」

「んな、サイヤ人じゃねえんだからよ……」

「まあ、すぐに筋肉がつくわけではないけれど、基礎代謝を上げるためにもトレーニングをしておく意味はあるわ」

「基礎代謝？」

「簡単に言うと、運動に適した身体にしていくことね。基礎代謝が上がるとカロリーを消費しやすくなるの。端的に言ってエネルギー変換効率上がるのよ」

「カロリーを消費し易く……つまり、痩せる？」

「そうね。呼吸や消化のときにもカロリーをより消費するようになるから、生きているだけで痩せていくことになるわね」

それを聞いて結衣の目がキラキラと輝いた。

「ちーちゃん！一緒にやろ？」

「私はいいよ。……これ以上痩せたら、胸無くなるし……」

最後の方はボソツと誰にも聞こえないように言った。で、戸塚の隣に結衣も並んで腕立て伏せを始めた。

「んっ……くっ、ふう、はあ」

「うう、くっ……んあっ、はあはあ、んんっ！」

押し殺した吐息が漏れてくる。辛そうな表情に、薄く汗をかき、頬は疲れて赤くなっている。そして、何より襟元から眩しい肌色がチラつく。

それを八幡と材木座はチラツと見ていた。

「八幡、なぜだろうな……。我は今、とても穏やかな気分だ……」

「奇遇だな。俺も同じ気持ちだ」

ニヤニヤしてる2人の後ろに千尋は立って言った。

「………あんたらも運動してその欲望に一直線の思考を正したら？」

「へぶっ!?……ふ、ふむ。訓練を欠かさぬのは戦士の心得。どおれ、我もやるとするか！」

「だ、だな。運動不足は怖いもんな、糖尿のか痛風とか、あーあと肝硬変とかなっ！」

ガバツと土下座でもするのかという勢いで腕立て伏せを始めた。すると、雪乃はわざわざ八幡の前に立った。

「こうして見ると斬新な土下座に見えなくもないわね」

「……雪乃、流石にそれはちよつとアレだよ」

千尋が盛大に引いていた。結局、その昼休みは丸々腕立て伏せで終わってしまった。

「ふう……疲れたあ……。今日でどれくらい落ちたかなあ……」

お前、さっきの説明本当に聞いてたの？と、言われてもおかしくない結衣の台詞を流しつつ、千尋はタオルを水で濡らして戸塚の所に

持って来た。

「はいっ、戸塚くん。お疲れ様」

「あ、ありがとう」

「雪乃は厳しいかもしれないけど、ちゃんと戸塚くんのことを思っ
てやってくれてるから、頑張ろうね」

「うん」

戸塚の笑顔が眩しい。それに千尋は思わず顔を赤くした。

(……………ほ、本当に男の子なのか……………?)

×××

放課後。

「じゃあまたね」

「ええ」

「おう」

「ばいばーい」

奉仕部も終わり、八幡と千尋は一緒に帰宅。ここ最近、部活のある日は毎日一緒に帰っている。まあ、一切会話しない時もあるが。

「クツソ……………こりや明日筋肉痛だな」

「大丈夫？自転車私が押そうか？」

「そのくらい平気だ。というか漕ぐくらいは問題ない」

「ならいいけど……………」

「……………なあ、早川」

「あん？」

「なんで一緒に帰ってんの？」

「……………家が隣同士で、帰るタイミングも同じだから？」

「や、それは分かるんだけど……………。周りの人に見られていいのか？」

「いいよ別に」

「風評被害とか気にしないのか？」

「友達いないし気にする必要ないよ。優実子とかは家別の方みたいだし」

「お、おう……」

「比企谷が迷惑だつて言うなら、別々に帰るけど」

「いや、迷惑じゃない」

少し八幡は戸惑った。つい癖で相手の言葉の裏を読みたくなるのだが、結衣と千尋は変な字幕が出ない。

（本当に俺のこと友達だと思ってくれてると思っただろうか）

少しだけ八幡は悩んでいた。

「別に線引きなんて考える必要ないよ」

その考えを見透かしたように千尋に言われ、八幡は少しうろたえた。

「同じ年で同じ学校で同じ部活なんだから、さ」

微笑む千尋。その時、八幡は「ああ、なるほど」と千尋が虐められていた理由がなんとなく分かった。

要は、クラス内カーストなど気にしない女なのだ。誰が相手だろうと、全員等しく対応する。だから、自分が上だと思っただけで連中からすればよく思われなくて、虐めの標的になる。

「……なあ、もしかして、」

「んー、なんか変なこと言っちゃったね」

八幡は聞いてみようと思ったが、千尋はノビをしながらその言葉を遮った。

「……なんか言った？」

「いや、なんでもない」

「そう？あ、それよりさ、平塚先生にいつも殴られてる比企谷のって、君でいいのかな？」

「……なんで知ってんのお前。つか何その聞き方」

「いやー前に聞いたことあるんだよね。けどもしかしたら同じ苗字の人がいるかもしれないし、だから聞いてみた」

「あの人は何を言ってくれてんだよ……」

「私もよくアイアンクロー喰らってるからねえ」

「……お前もかよ」

「平塚先生に年齢のこと言ったら怒るんだもん」

「オイ、あんま言ってやるなよ。気にしてるんだから」

「分かってるよー。てか比企谷に言われたないし」

「そうかもな」

「ねえ、」

「ん？」

「八幡って呼んでいい？」

「……………は？」

何言ってるんだこいつ、みたいな顔をする八幡。

「やーだつてさ。小町ちゃんもいるじゃん？比企谷って呼ぶと二人とも振り向いちゃいそうで……………」

「まあ、構わんが……………」

「私のことも千尋かちーちゃんでもいいよ」

「早川でいいだろ」

「じよーだんだよ。つと、もう家着いた。またね、八幡」

「ああ。またな」

2人は別れた。

壁打ちと三浦と早川と由比ヶ浜

次の日の昼休みは、千尋は優美子達とご飯を食べていた。八幡に「まだ関わり始めて数日なのに長期間一緒にいなくなるのはマズイ」というアドバイスで。

さらにその翌日の昼休み、いよいよラケットを持つての練習となった。

「よーっす、お待たせ〜」

千尋が少し遅れてテニスコートに来た。

「あら、今日は三浦さん達と一緒にでなくていいの?」

「いやー私も奉仕部の一員だしさー、任せつきりは悪い気もするしね」
雪乃に聞かれてサラッと答える千尋。

「で、何するの?」

「私が基本的に指揮を取るから、あなたはお手伝いよ」

とのことで、雪乃と結衣と戸塚は練習開始。ボールを左右に振って投げ、それを戸塚が打ち返すという練習なのだが、結衣と雪乃で人数は足りてゐるため、八幡と材木座と千尋は暇そうにしていた。

八幡は蟻の観察、材木座は必殺ショットの研究、千尋は1人で壁打ちしていた。壁に石で傷を付けて、そこに向かって何回当てられるか。当てた数だけ自分に何かご褒美とか考えながら。

「……トランザムツ!!?」

そう小声で叫ぶと、小声で叫ぶってなんだ? まあいいや、小声で叫ぶと、強く打ち始めた。強く打った球が壁に当たり、強く跳ね返った。

「俺が、ガンダムだッ!」

フルパワーで打ち返す。当然、強く返ってくる。おデコに直撃、「うおっ!」と可愛げのない悲鳴とともに後ろに倒れた。

「親父いーっつ!!?」

八幡の悲鳴も響いた。どうやら、蟻さんがボールによって掻き消されたようだ。

「ふむ、土煙を巻き起こして相手を幻惑し、その隙に玉を叩き込む。

……どうやら、魔球が完成してしまったようだ。豊穰なる幻の大地『岩砂閃波』が！」

材木座の奇声も響いた。

「ちよつとー、あんたら静かにしててよー」

「お前が言うな」

八幡がもつともな返しをした。

「つか、八幡何してんの？」

「蟻の観察、もうその影すらないけどな」

「……………『八幡』？」

コートにボールを投げていた結衣がピクツと反応した。

「由比ヶ浜さん、あの辺は放っておいていいから続けてくれるかしら？」

「う、うん」

その声に気付かなかったのか、八幡と千尋はそのままガンダムの議論を続けた。すると、ドサアツ！と音が響いた。

「だ、大丈夫さいちちゃん!!？」

どうやら、戸塚が転んでしまったようだ。慌てて結衣が駆け寄るも、戸塚は笑顔で言った。

「大丈夫だから、続けて」

「まだ、やるつもりなの？」

それを聞いた雪乃が顔を顰めた。

「うん……………、みんな付き合ってくれるから、もう少し頑張りたい」

「……………そ。じゃあ、由比ヶ浜さん。あとは頼むわね」

そう言うと、雪乃は校舎の方へ向かった。

「な、なんか怒らせるようなこと、言っちゃった、かな？」

「いや、あいつはいつもあんなもんだ。むしろ、愚かだの低脳だの言っていないぶん、機嫌がいい可能性だってある」

「それ言われてるの八幡だけでしょ」

「ねえ、それ。いつから下の名前で呼ぶようになったの？」

結衣が八幡と千尋に聞いた。

「え？一昨日くらいかな？」

「ああ。一緒に帰ってる時に急に早川が言い出したんだよ」

「うん。何となくね。でも八幡は中々『ちーちゃん』って呼んでくれないんだよねー」

「呼ばねつつつてんだろ」

「……………むー」

「それよか、早く練習続けようぜ」

八幡に言われて、結衣は仕方なさそうに続けようとした。その時だ。

「あ、テニスしてんじやん、テニス！」

声の方には、三浦、葉山、海老名さん、戸部、大岡、大和というつものメンバーが揃っていた。

「あ、結衣達だったんだ……………」

海老名さんが小声でそう漏らした。結衣は困ったように一歩引く。

「おーい、優美子ー！」

が、千尋にはまるで不安がないのか、元気よく手を挙げた。

「あ、千尋ー。あんた何してんの？」

「部活の一貫で戸塚くんのテニスの練習に付き合ってるんだ。お昼一緒じゃなくてゴメンねー」

「別に気にしてないし」

その会話を見ながら、八幡は「スゲエな」と感心する。あの炎の女王にまったく恐れることなく接することが出来る人材はそういない。

「でさあ、千尋。あーし達テニスしたいんだけど」

「あーどうなんだろ。ちよつと待ってて」

で、千尋は戸塚に聞いた。

「ねっ、優美子達もここ使っても平気？」

「うーん……………そ、その、今までお願いしてて、この前ようやくOKが出たところだから……………あまり部外者が多いと、遊んでるって思われちゃうから……………」

「うーん……………無理ってこと？」

「うん……………」

すると、千尋はその事を優美子に説明した。が、当然顔をしかめた。

「はあ？意味わかんないんだけど」

「だから、私や結衣達は……なんていうか、手伝ってるだけというか……」

正直、さっきの説明で分かってもらえないとなると、千尋としてはお手上げだった。どうしたもんかと考えてると、隣の葉山が声を掛けた。

「じゃあ、テニスで決めないか。部外者同士で試合して、勝ったほうが戸塚の練習に付き合う。戸塚も強い奴と練習したほうが強くなるだろう？」

完璧理論を叩きつけられて千尋は後ろを見た。八幡、材木座は目を逸らし、結衣は苦笑いし、戸塚はオロオロしていた。こいつら使えねー……と、思いつつ千尋は「それでいいよ」と答えた。

×××

葉山が試合をするということと、お前ら宗教かよってレベルでギャラリーが集まった。

「HA・YA・TO！フウ！HA・YA・TO！フウ！」

という歓声の中、千尋は4人の元へ引き返し、説明した。

「と、いうことになってしまいました」

「ね。ヒッキー、どうすんの？」

「どうするも何も……」

「向こうは葉山くんが出て来ると思うから、男子同士の方がいいよね。てなわけで、八幡よろしく」

サラッと千尋はなすりつけた。

「おい待て。なんで俺だ。おい材木座、テニスの経験は？」

「任せておけ。全巻読破したし、ミュージカルまで見に行ったクチだ。庭球には1日の長がある」

「お前に聞いた俺がバカだった。あと、テニス言い換えたんならミュージカルも直せよ」

「では、八幡が出るほかあるまい。……おい、ミュージカルは日本語で

なんというのだ？」

「そうだよな……」

はぁーよかった……と、千尋は内心ホツとしてると、ラケットを担いだ三浦がこっちに声をかけた。

「ねえ、早くしてくんない？」

「あれ？優美子がやるの？」

千尋が汗を流しながら言った。

「はぁ？当たり前だし。あーしがテニスやりたいつつたんだけど」

「だつてよ早川。お前に任せた」

仕返しのつもりで、サラツと八幡は千尋に擦りつけた。が、

「あ、じゃ、男女混合ダブルスにすればいいじゃん？うそやだあーし頭いんだけど」

と、いう優美子の声で、八幡も汗をかいた。どうやら、お互いになりつけあった2人が組むことになりそうだと、千尋が思つてると、八幡が千尋とさつきから黙つてた結衣に言った。

「お前らは無理してこっちにいない必要ないんだぞ。俺と違って居場所があるんだから、そっちを守ればいい」

結衣はそれを聞いて俯いた。が、千尋はすぐにあっけらかんと返す。

「はぁ？別に無理なんてしてないよ。私もこう見えてテニスは苦手じゃないし」

「……ヤル気なのか？三浦、お前のことめっちゃガン見してんぞ」

「大丈夫だよ、このくらいで優美子は人のこと嫌いにならないって。それに、」

そこで千尋は八幡に耳打ちした。

「……葉山さんとテニス出来るって時点で、ある意味優美子の目的は達成されてるようなもんじゃん」

「お、おう……」

少し顔を赤くする八幡。女性と顔が近くなつたのは初めての経験だったから、少し耐性がなかったようだ。

「千尋。あんたそっちに付くつてことは、あーしとやるつてことにな

るんだけど、そゆことでいいわけ？」

「そっちに付くとかじゃないよ。私は、どっちも大事にしたいだけだから。それは、結衣も同じだと思うよ」

微塵のテレもなく、微笑みながら言うと、結衣は驚いたように千尋の方に顔を上げ、優美子は目をパチパチさせると、「そう」と短く答えて目を逸らした。

「…………お前すげーな」

「？　なんで？」

八幡に感心されたが、千尋はキョトンと首を傾げた。

試合とラリーと選手交代

テニスウェアに着替えた優美子と千尋は、テニス部の部室裏から出てきた。

「よーっす、お待たせ〜」

千尋は元気良く挨拶した。遅れて後ろから優美子が現れる。

「……つか、当たり前前のように女子枠お前になってるけど、テニスできんの？」

「んー、まあ少しだけ？」

「お前それでよく自分からやるって言い出したな」

「うるさいなー。そもそもそう言う八幡はどうなのさ」

「体育でやったくらいだな。それと人と打ち合ったのは一回だ」

「八幡のが酷いじゃん……。よしっ、接戦で負けよう！」

「負けちゃうのかよ……」

八幡が呆れ気味に言った。で、試合開始。試合はお互いにテニスのルールがイマイチ分かってないので、ただの点取り合戦のような、バレーボール的なルールだ。で、優美子からサーブを打った。

スパシイインツツと鋭い音を立てて、ラケットがボールを叩き付ける。

「うおっ」

2人とも反応できなかった。思ったより強い球が飛んで来たからだ。

「……おいおい、マジかよ」

「知らないの？優美子、中学の時に県選抜出てるんだよ？」

後ろから結衣がそう言った。「そういうことは早く言え」と2人が思ったのは言うまでもない。

「どしたー？もしかして反応できなかったん？もっとレベル落としてあげようか？」

挑発するように優美子は言うと、2球目をダムツダムツと地面に着きながら上にヒョイッと放った。

「怪我しないように、ねッ！」

2球目を放つ優美子。だが、それに千尋は追い付き、打ち返した。「ッ！」

まさか打ち返されるとは思ってたなかった優美子も葉山も反応が遅れ、1点取り返した。

「おおー！すごいちーちゃん！」

感動的な声を結衣が上げた。

「……実は、私もテニス得意だったりするんだよね」

「千尋ッ……！」

好戦的に微笑む千尋と、それをまた挑戦的にほくそ笑む優美子。

（この表現の差はなんなんだろう……。やっぱり人間性の差なんだろうか）

八幡がそんな事を思っていると、ヒョイツと千尋の方からボールが飛んできた。

「サーブ」

「お、俺がやんの？」

「よろしこ」

「S級ランク3位のジジイかよ」

そうツツコミながら、八幡はボールを持ってサーブの準備をした。「っ」

ボールを打った。そこそこ良い球が飛んだのだが、イケメン王子とテニスのお姫様どころか女王相手には絶好球だった。

「っらあー」

優美子が打ち返す。

千尋が打ち返す。

葉山が打ち返す。

千尋が打ち返す。

葉山が打ち返す。

千尋が……打ち返す。

優美子が打ち返す。

千尋が……打ち返す。

優美子が…打ち返す。

千尋が……打ち返、す。

葉山が打ち返す。

八幡が……と見せかけて千尋が打ち返す。

優美子が打ち返す。

千尋が打ち損ねる。

「つてお前も打てよッ!!?」

流石に八幡にキレた。

「こつちにボール来ないんだから仕方ないだろ。完全にお前狙われてんぞ」

「私だって……ギリギリ、なんだから……やめて欲しいね……」

息を切らしながら言う千尋。

「つーかお前テニス上手いな」

「あーまあね。中学の時とか、友達欲しくて1人でよく色んなスポーツ練習してたし……」

「……………」

理由がとても悲しかった。

まあ、そんな一幕もあったりしたが、試合は続いた。千尋が意外と上手いことを知った葉山三浦ペアは、八幡に狙いを切り替えたが、八幡も八幡でそこそこ出来るため、ほとんど正面からの殴り合いになった。だが、善戦はしているものの負けている。

それを見て、結衣は校舎の方に走った。

「なあ、あの子結構上手くね?」

「てか可愛くね?」

「それな。必死にボール追いかけてる所がなんかエロイ」

「お前それどこのボールだよwww」

なんて声が聞こえて来るたびに顔を赤くしながらも打ち返す千尋だった。

「どうするの八幡……。このままじゃいいとこ五分だよ」

「そう言われても、打つ手なんてねーよ。このままじゃマジで負けるぞ」

「負けたら、ここ渡すんだよね。冷静になつて考えたんだけど、明日以降も、とかあるのかな」

「分かん。それこそ向こうの女王様次第だろ」

「女王つて……いやなんとなくわかるけど。とにかく、こうなつたらなるべく時間稼ぎしよう。授業終わりまで引きずればなんとかなるっしょ」

「その場合はその時の点数で勝敗決められちゃうんじゃないの」

「なら、そこまで取り返すしかないよ。まだ点差は2点しかないんだし」

「本気かお前」

「本気だよ」

ニコツと微笑む千尋。すると、向こうから球が飛んで来た。それを千尋は打ち返す。そのまま、またラリーが続いた。

「ツ!!??」

息を吐きながら八幡が打った。それが上手い具合にコートの際に落ちた。

「おお!八幡ナイス!」

千尋がそれを見て八幡にハイタッチを求めた。

「お、おう……」

かろうじて応じる八幡。そして、八幡のサーブになった。最初のサーブよりはマシな球を放ち、それを葉山が打ち返した。さらに、千尋が返す。さらに優美子が返した。その球はネットに当たり、うまい具合に千尋達のコートへ落ちた。

「っ!」

(これ以上、点差を離させるわけには……!!??)

そう心の中で唱えると、千尋は前のボールに飛び込んだ。

「ふぬをつ!!??」

変な叫び声とともにボールにダイブし、なんとか打ち返した。

「つて、早川。大丈夫か?」

慌てて八幡は千尋の元へ駆け寄った。ちなみに打球は見事に向こうのコートの中に収まった。

「う、うん……なんとか、ね」

「つて、足グロいことになってんぞ」

「このくらい平気だよ」

千尋は言いながら立ち上がろうとするが、「いてっ」とすぐに座り込んだ。

「全然平気じゃねーだろうが。もういいから休めよ」

「そうよ。休みなさい」

後ろから声がした。振り返ると、ジャージに着替えた雪乃と制服の結衣が立っていた。雪乃は片手に救急箱を抱えていた。

「あ、お前、何処行つてたの？てかさっきまで制服じゃなかった？」

「これを取りに行つていたのよ。それと、由比ヶ浜さんに大体の事情を聞いてお願いされたからよ」

「てことは何、テニスやんの？」

「早川さんと組むと思つていただけだけど、その状態じゃできなさそうだし、非常に不本意だからあなたと組んであげるわ」

言うのと、雪乃は千尋に手を差し伸べた。

「大丈夫？傷の手当は自分で出来る？」

「うん、平気。でもこれ、戸塚くんのためのものじゃ……」

「別に一人分しか用意してないわけではないわ」

「ありがたく手を取る千尋。で、立たせてもらおうと、結衣が大袈裟に声を出した。

「つて、ちーちゃんどうしたの!?？うわっ、グロ！」

「結衣、もう少し声と胸のボリューム抑えて」

「胸も!?？つて、ヒッキー何処見てんのよヘンタイ！」

「いや何処も見えてないんだが」

結衣に肩を貸してもらいながらコートの外へ出た。で、雪乃は落ちてる千尋のラケットを拾い上げる。そこに優美子が声を掛けた。

「雪ノ下サン？だっけ？悪いけどあーし、手加減とかできないから。オジヨウサマなんでしょ？怪我したくなかったらやめといたほうがいいと思うけど？」

「私は手加減してあげるから安心してもらつていいわ。その安いプラ

イドを粉々にしてあげる」

その様子を見ながら、八幡はこれほど心強い味方はいないと、割と本気でそう思った。

雪ノ下と比企谷の決着

そんなわけで、雪乃と八幡がコンビを組んでテニス勝負再開。

「いだだだだッ!!?」

「ち、ちーちゃん! あんま大きな声出さないで!」

「し、染みる……! 消毒液……!」

「子供じゃないんだから……」

「それ、結衣に言われたくない」

「どういう意味だ!?!」

なんていうコートの外での一幕は置いていて、試合はほとんど一方的だった。どれくらい一方的だったかというところ、

「フハハハハ! 圧倒的じゃないか我が軍は! 薙ぎ払えーっ!」

と、材木座がやかましくなるほど。あつという間にマッチポイントになった。

「……お前ほんととんでもねえのな。その調子で軽く決めちゃえよ」

「私もできればそうしたいのだけれど……。それは無理な相談ね」

バレーボール基準の点の決め方で、すでに24対19。千尋の退場が18対18だから、すでに雪乃1人で6点取ったことになっている。で、今は葉山のサーブ。

「無理って、なんでだよ」

と、八幡が聞くと、ポーンとボールが飛んで来る。

「雪ノ下」

任せるつもりで声をかけた。が、雪乃は反応しなかった。

「おい」

「比企谷くん、少し自慢話してもいいかしら」

「何だよ。つーか今のプレイが何だよ」

「私、昔からなんでもできたから継続して出来たことがないの」

「いきなり何の話だ」

「昔、テニスを教えてくれた人がいたのだけれど、3日でその人に勝ったわ」

「逆三日坊主かよ。てか本当に自慢話だな。何が言いたい」

「私、体力にだけは自信がないの」

「……………」

その瞬間、向こうのコートの上美子が勝気な笑みを浮かべた。

「聞こえてるんですけど?」

シユバツ!とサーブをぶち込まれ、また一点取られた。そのまま、あつという間に追い付かれ、24対24のデュースになった。優美子がラケットを担いで言った。

「なんかしゃしゃつてくれたみたいだけど、流石にもう終わりっしょ?」

「まあまあ、あんまガチにならないでさ。お互いよく頑張ったってことで、引き分けにしない?」

「ちよつ、隼人。これ勝負なんだしカタ付けないとヤバイっしょ」

そんな声が向こうのコートから聴こえてきた。

「黙りなさい」

が、そんな中でも雪乃の冷たい声はよく通る。そして、ラケットで八幡を指して言った。

「そのカタはこの男がつけるから、大人しく敗北なさい」

「ちよつと雪ノ下…………」

「知ってる?私、暴言も失言も吐くけれど、虚言だけは吐いたことがないの」

「そうは言われてもな…………」

と、八幡が言ったときだ。ヒユウつと風が吹いた。それによって、八幡は総武高校に訪れる潮風を思い出す。

「…………分かったよ」

そして、サーブ位置に八幡が付いた。風の流を感じつつ、八幡はゆるやかなサーブを放った。

「シャアッ!」

赤い彗星のような雄叫びを上げながら優美子がボールに向かった。が、特殊な潮風により、ボールは優美子の裏をかいた方へ落ちる。そこに、葉山がカバーに入っているも、潮風はもう一度吹いた。見事に葉山

の裏をかき、ボールは静かにコート内に落ちた。

八幡がいつも飯を食べている所で、いつもぼんやりとテニスコートを見ていたために打てる魔球だった。

「そういえば聞いたことがある……。風を意のままに操る伝説の技、その名も『風を継ぐ者・風精悪戯』!!?」

材木座が勝手に命名した。周りもその『風精悪戯……?』と復唱し始める。

「やられた……。本当に『魔球』だな」

と、葉山がボールを八幡に私ながら微笑んだ。

「葉山。お前さあ、小さい頃野球つてやった?」

「ああ、よくやったけど、それがどうした?」

「何人でやった?」

「は? 野球は十八人揃わないとできないだろ」

「だよな。……でもな、俺は一人でよくやってたぜ」

「え? どういうこと?」

葉山が聞くが、八幡は説明を加えようとせずにサーブの位置へ引き返していく。そして、ボールを放った。

「っ! セーシユンのばかやるおおーーツ!!?」

吠えながらボールをラケットの側面で思いつき打ち上げた。そして、殴られたボールは上に舞い上がる。

「あ、あれは……。『空駆けし破壊神・隕鉄滅殺』!!?」

だからなんでお前が名前つけんだよ、と八幡は心の中でツッコミを入れる。

八幡は昔、一人野球を開発し、それがこれだ。一人で球を打ち上げ、一人で取る。取ればアウト、ミスってワンバウンドキャッチならヒット、ミスって遠くに打ち過ぎたらホームラン。

まあ、その説明はいいとして、ボールが空に舞い上がり、空中で止まった。そして、今度は自由落下するのみだ。

「な、なにそれ」

優美子が空を見上げたまんま呆然とした。すると、葉山が叫んだ。

「優美子っ! 下がれ!」

言われて優美子はハツとする。ボールは優美子側のコートへ落ちた。ダムツとコートに着弾すると、もう一度舞い上がる。それを優美子は見ながら追った。

ボールは金網のフェンスへふらふらと向かっていた。それを追う優美子。このままではフェンスに優美子が激突する。

「くっ！」

葉山は優美子の方へ駆け出した。そして、ガシヤアアアアンツツとフェンスに激突する音がした。葉山が優美子を庇うように抱きかかえていた。その優美子は赤い顔でちんまりと葉山の胸元を握っている。

その瞬間、ギャラリイ達からワアツ！と歓声が上がった。

「H A・Y A・T O！フウ！H A・Y A・T O！フウ！」

と、葉山コールと共に昼休み終了のチャイムが鳴った。そのまま、わーっしよいわーっしよいと、胴上げしながら校舎の方へと消えていった。

×××

残された八幡、雪乃、結衣、千尋、材木座、戸塚はしばらく呆然としていた。

「試合に勝って勝負に負けた、というところかしらね」

「バカ言え。俺とあいつらじゃハナっから勝負になってねえんだよ」

「ま、そうだよ。ヒッキーじゃなきやああはならないもん。勝ったのに空気抜いていうか、ガチで可哀想になる」

「おい、由比ヶ浜。お前は本当に言葉に気をつける、悪意に満ちた言葉より、素直な感想の方が人は傷つくということを知れ」

「まあまあ、お陰でコートは守れたんだからいいじゃん。計画通り」
「嘘つけ。途中で不安になってた奴の台詞じゃねえぞ」

と、雪乃、八幡、結衣、また八幡、千尋、さらに八幡と言った。

「そうそう、ちーちゃんすごいね！バレもだけど運動得意なの？」
「……………」

「? どしたのちーちゃん?」

「由比ヶ浜、人には聞いていい話と聞いちゃいけない話があるってことをそろそろ覚えような」

「な、なんで!??今、マズイこと聞いたあたし!??」

すると、材木座が唐突に口を開いた。

「八幡、よくやった。さすがは我が相棒よ。だが、いずれ決着をつけなければならぬ日が来るやも知れぬな……」

「怪我、大丈夫か?」

「うん……。早川さんほどじゃないし」

材木座の台詞をまるで無視して、八幡は戸塚に声をかけた。

「比企谷くん。……。あの、ありがとう」

「俺は別になんもしてないよ。礼ならあいつらに……」

と、言いかけて辺りを見回すが、女子組はいなくなっていた。何処に行ったのかと首を振ると、テニス部の部室の脇で、ひよこひよここと揺れるツイントールを見つけた。

礼の一言でも言っておこうと、八幡は部室の方へ歩いた。

「ゆきのし……。あっ」

思いつきり雪乃、結衣が着替えていた。千尋の姿がないのは、おそらく着替えがテニス部の部室の中にあるからだろう。

「もうほんと死ねっ!」

八幡の顔面に結衣の全力フルスウィングが炸裂した。

(……そうだよな、やっぱり青春ラブコメはこうでなきや。やるじゃん、ラブコメの神様)

そう心の中で呟きながら、ぐふつと声を漏らした。

テニス後の奉仕部部室

放課後、千尋の脚は擦り傷以外に捻挫だった。保健室で治療してもらったため、5限は丸々サボるはめになり、6限から復帰、今は放課後である。

捻挫と言っても、そんな酷いモノではなかったため、松葉杖はナシ。でも帰りは自転車は押して帰るハメになりそうだ。

そのまめ、優美子や結衣に遊びに誘われたのだが、怪我してるので断った。ハア……とため息を吐きながら部室に入ると、中には八幡と雪乃がいた。

「おーっす」

挨拶して入ると、雪乃が振り返った。

「あら、あなたは由比ヶ浜さん達と一緒に遊びに行ったのではないの？」

「この怪我じゃ行っても気を使わせるだけだよー」

「怪我は大丈夫？」

「うん。平気。いやー雪乃すごいねー。テニス超上手だったじゃん」

「そうね。でもあなたも中々食らいついてたんじゃないかしら？」

「おお、雪ノ下が他人を褒めるなんて珍しいこともあるんだな」

「あなたが私のことをどう思ってるかよくわかったわ」

うふふと微笑む雪乃に心底ビビる八幡。その横を通って、千尋は椅子に腰をかけた。すると、突然ガラツと扉が開いた。

「邪魔するぞ」

平塚先生だ。すると、「はあ……」とため息をつく雪乃。

「平塚先生、入る時はノックをしてくださいよ」

「ん？それは雪ノ下の台詞じゃなかったか？」

八幡の台詞に全く関係ないことで返す平塚先生。

「おーっす！」

「足は大丈夫か早川」

「うん。平塚ちゃんこそ婚活大丈夫？」

「……教師にナメた口聞くのはこの口か？」

「いふあいれふいふあいれふ！ふおふおを掴まないでくだふあい！」

グイーツと千尋の両頬を摘み上げる平塚先生。

「それで平塚先生、ご用件は」

「おお、そうだった。例の勝負についてだ」

千尋の頬から手を離す平塚先生。

「いてえ……勝負？」

頬をさすりながら千尋は聞いた。

「そうか。早川は知らなかったな。私の独断と偏見で勝敗を決めてい
る。勝者は敗者になんでも言うことを聞かせることができるのだが、
参加するか？」

「なんでも？…します！」

「ふむ、了解だ。ただし、途中参加により2人よりやや遅れてのスター
トになるが、構わないか？」

「大丈夫ですよー。すぐに追い越しますから」

「……舐められたものね」

千尋に挑戦的な視線を送る雪乃。それを見ながら八幡は少し引い
ていた。

「それで、2人の戦績だが、今の所互いに雪ノ下が3勝、比企谷が2勝
といったところだな。うむ、接戦はバトル漫画の華だ。……個人的に
は比企谷の死を乗り越えて雪ノ下が覚醒、という展開を期待してい
たんだが」

「なぜ俺が死ぬ展開……。ていうか、依頼4人しか来てないんですけ
ど」

「私のカウントではちゃんと5人いるんだよ。独断と偏見と言ったろ
うが」

「俺ルールもそこまでいくと清々しいですね」

すると、千尋が口を開いた。

「で、これはどうすると1勝になるの？」

「ふむ、そうだな。悩みという感じはりっしんべん、つまり、心の横に
凶の字を書く。さらにその凶という字に蓋をしてしまうんだ」

「何年B組だよ」

「随分と穴だらけの蓋だね」

「いつだって悩みというのは本心の脇に隠されているものだ、相談してくる内容が本当の悩みとは限らない、ということだよ」

「最初の説明、まったくいららないですね」

「別に上手いこと言ってるねえしな」

「で、それなんのパクリ？」

雪乃、八幡、千尋とバツサリ切り捨てた。

「ぱ、パクリじゃないぞ。自分で少し考えてみたんだ！」

年甲斐もなく声を荒げる平塚先生。

「まったく、君たちは人を攻撃する時は仲が良いな」

「どこが……。この男と友人になるなんてことなんてありません」

「私は八幡と友達だよ。家も隣同士だし」

「ね？」とでも言うように微笑みかける千尋に「お、おう……」と八幡は困惑したように返すしかなかった。すると、パサツと音がした。雪乃が本を落とした音だ。

「……比企谷くん。洗脳を解きなさい。犯罪よ」

「してねえよ。変に懐かれた」

「人を動物みたいに言わないで」

ぷいっと千尋はそっぽを向いた。すると、雪乃がその千尋の肩に手を置いた。

「考え直しなさい、早川さん。その男の友達になるということは、世界を敵に回すようなものよ」

「俺は魔神かよ」

「大丈夫だよ雪乃。八幡はこう見えて妹いるから」

「……………それと彼が大丈夫であることとの関係を教えてくれる？」

「うーん……………妹に『お兄ちゃん』って言われるってことは、家ではまともってことだよね？」

すると、雪乃は八幡の肩に手を置いた。

「良かったじゃない。友達ができて。それも女の子よ。これからもう増えることもないんだから、大切にされた方がいいんじゃない？」

「増えることないのかよ。いや、あってるんだけどさ」

「なに、八幡は私が友達なのが不満なわけ？」

「奇跡的に出来た友達なんだから、ありがたく思いなさい」

千尋と雪乃に言われて、思わずしよぼくれる八幡。

「大丈夫よ。早川さん以外にもきつと、あなたと友達になってくれる
昆虫が現れるわ」

「虫かよ！せめてもつと可愛い奴にしろよ！」

「ていうかそれ、私のこと虫って言ってる!?!？」

2人に反論されても、涼しい顔で雪乃はそれを流した。

職場見学と八幡のメール

職場見学希望調査書

総武高等学校 2年C組 早川千尋

1. 希望する職業：お嫁さん
2. 希望する職場：平塚せんせーの自宅
3. 理由を以下に記せ

女の子がお嫁さんになるのに理由はいららないと思います。

と、いう職場見学希望調査書を提出したら、八幡と一緒に千尋は職員室の応接室に呼び出された。

千尋も八幡も居心地悪そうにソワソワしている。理由は、目の前の千尋にとっては羨ましい完璧なボンツキュツボンツスタイルの女教師、平塚静先生が不機嫌そうに2人の書いた調査書を読み上げたからだ。

そして、一通り読み終わると、パスツと机の上に調査書二枚を放った。

「さて、2人とも。私が何を言いたいかわかるな？」

「……そ、その前に、なんで私まで平塚先生に怒られてるんでしょうか……」

「お前が不用意に私の名前をここに書いたからだ。お陰でC組担任の先生に哀れまれるような目で見られてしまったよ」

ギロリと睨まれ、萎縮する千尋。

「さて、質問の続きだ。何が言いたいかわかるな？」

「さ、さあ……」

「そう言われましても……」

「まさか、分からないとでも言うつもりか？」

二人の台詞に握り拳を作り、ゴキツと指を鳴らす平塚先生。

「か、書き直します殴らないで！」

慌てて2人はお互いの両手を掴み合った。

「当たり前前だ。まったく……比企谷。少し変わったかと思えばこれか
ね?」

「俺のモットーは初志貫徹なので」

「てへっ☆と自分の頭をコツンと叩くのと、平塚先生の額に青筋が立
つのはほとんど同時だった。」

「……やはり殴るしかないか。テレビでもなんでも、やっぱり殴って
直す方が早い」

「いや俺精密機械なんでちよつと…あと最近のテレビは薄型なの
で殴りようがないですよ。やっぱり歳の差を感じ」

「衝撃のファーストブリットオツ!!?」

「ゴスツというど地味な音が、八幡のボディを確実にとらえた。」

「……………うーわ」

「痛そー……と言った声が千尋の口から漏れる。」

「撃滅のセカンドブリットを食らいたくなくなったら、それ以上は口に
しないことだ」

「すいませんでした……。抹殺のラストブリットも勘弁してくださ
い」

「八幡が死にそうな声でそう言うと、満足したような笑顔を浮かべる
平塚先生。」

「うむ、比企谷は理解が早くて助かる」

「それ、ただ調教してるだけなんじゃ……」

「何か言ったか早川?」

「何でもありません」

「つい口から漏れた言葉も拾われ、速攻で謝った。」

「というか、お前はなんでお嫁さんで私の家なんだ」

「それはもちろん、平塚先生より男前な人を私は見たことが」

「撃滅の」

「ないのは関係なくて、間違えて書きちゃっただけです!」

「セカンドブリットオツ!!?」

「それアイアンクロオオオオいだだだ!!?ご、ごめんなさい平塚先
生!」

素直に謝ると、手を離した。

「当たり前だ。女子生徒を殴るわけにはいかないからな」

「うう…アイアンクローでも大して変わらないですよお……」

悶絶してる2人に平塚先生は言った。

「とにかく、職場見学希望調査票は再提出。それと、私の心を傷付けたペナルティとして調査票の開票を手伝いたまえ」

「……………はい」

そんなわけで、2人は連行された。

× × ×

「にしても、なんでこの時期に職場見学なんてやるんですかね」

もそもそと紙束を希望職種ごとに分けながら、八幡が言った。

「こんな時期だからでしょ。来年は私達も受験生なんだし」

「それもあるし、3年次にはコース選択もある」

「そんなありましたっけ」

「HRで伝えているはずだが……」

「はあ、俺の場合ホームルームなんてアウエーなんで全然聞いてないんすよね」

「うわあ……八幡それはないよ……。私なんてクラスで話しかけてくれる人なんて先生しかいないから毎回キチンと聞いてるよ」

「それもどうかと思うが……」

平塚先生が呆れたようにため息をついた。

「とにかく、ただ漫然と試験を受けるのではなく、将来への意識を明確に持つてもらうために、夏休み前の中間試験直後に職場見学が設けられているんだ」

「……八幡、なんかロクでもないこと考えてるでしょ」

「お嫁さん志望のお前に言われたくねーんだよ」

「君たちは文系理系どっちにするんだ？」

問われて、2人がどっちが先に答えるか見つめ合っていると、

「あー！こんなところにいた！」

と、騒がしい声が乱入してきた。結衣の声だ。

「おや、由比ヶ浜。悪いが2人を借りてるぞ」

「ひ、ヒツキーは別にいいです！ぜ、全然いいです！」

「俺限定でいらんのかよ……」

「よーつす、結衣」

地味に傷ついてる八幡をよそに、千尋が挨拶した。

「で、結衣。どうかしたの？」

「あなた達がいつまでたっても部室に来ないから捜しに来たのよ」

その後ろから雪乃の落ち着いた声がした。

「わざわざ聞いて歩いたんだからね。そしたら、みんな『比企谷？誰

？』って言うし。超大変だった」

「その追加情報いらねえ……」

「ていうか、八幡はいらんのに八幡の名前で聞いて歩いてたんだ？」

ニヤニヤしながら千尋が聞くと、ハツとする結衣。

「ち、違うから！言葉のサヤだから！」

「綾ね。まあ言葉ほど鋭利な刃物はないから鞘は必要だけどさ……」

「と、とにかく、超大変だったんだからね！」

なぜか二回言う結衣に、八幡はとりあえず謝った。

「なんだ、その、悪かった」

「別に、いいんだけどさ……。そ、その……、だから、け、携帯教えて

？ほ、ほら！わざわざ捜して回るのもおかしいし、恥ずかしいし……。

どんな関係が聞かれるとか、ありえ、ないし」

と、顔を赤らめながらポツリポツリと言う結衣。すると、八幡はポ

ケットから携帯を出した。

「ん」

結衣も嬉しそうな顔を見ると、ポケットからキラキラデコデコした

携帯電話を取り出した。

「……なにその長距離トラックみてえは携帯」

「え？可愛くない？」

「わかんねえ。ビッチの感性がわかんねえ。なに、お前ヒカリモノ好

きななの？カラスなの？それとも寿司通なの？」

「はあ？寿司？ていうかビッチ言うなし」

「比企谷。さすがにヒカリモノだからといって高校生には通じないと思うぞ」

「ヒカリモノって……鯖とかですよね？」

「通じてますよ」

早川がキョトンと答えると、八幡がジロリと平塚先生を見た。

「ていうか、迷わず人に携帯渡せるのがすごいね」

「別に、見られて困るものもないしな。メールも妹とアマゾンとマツクからしか来ないし」

「うわっ！ほんとだ！しかもほぼアマゾ……ん？」

「なんだよ」

「……ちーちゃんとメールしてるの？」

「……あー。いや、アドレス登録してあるだけだ」

「ほとんどLINEでやり取りしてるよね」

「お前、暇になるとたまにガンダムの画像連投してくるだろ。あれやめろ」

「いいじゃん。ちゃんと八幡も送ったモバイルスーツのパイロットご丁寧にやり返してくるし」

と、千尋と八幡のやり取りを羨ましそうな目で見たあと、結衣は高速でアドレスを打ち始めた。

「打つのはえーなお前」

「んー別に普通じゃん？ヒツキーの場合、メールの相手がちーちゃんしかいないから指が退化してるんじゃないの？」

「失礼な……俺だって中学の時は、女子とメールくらいしてたぞ」

その瞬間、ゴトリと音がした。結衣の手から八幡の携帯が落ちる音だ。

「うそ……」

「ねえ、お前今酷いアクションしてることに気付いてる？気付いてないよね？気付け」

「……あー。や、ヒツキーが女子とってというのが想像できなくて」

「ばっかお前。俺なんてちよっとその気になればなんてことないぞ。

クラス替えでみんながアドレス交換してる時に携帯取り出してキョロキョロしてたら、『……あ、じゃあ、こ、交換しよつか?』って声かけられる程度にはモテたといつていいな」

「じゃあ……か、優しさはときどき残酷ね」

雪乃が暖かな笑みをこぼした。

「憐れむなよ! そのあとはちゃんとメールしたし」

「その子はどんな感じの子だったの?」

結衣が聞いた。

「そうだな……。健康的で奥ゆかしい感じだったな。なんせ、夜7時にメールを送れば次の日の朝に返ってきて『ごめん、寝てたー。また学校でねー』と返ってくるくらいけんこうてきだったし、そのくせ教室では恥ずかしがって話しかけてこないほど慎ましくお淑やかだった」

「う、それって……」

「寝たふりしてメールを無視していたのね。比企谷くん、現実から目を背けないで。きちんと現実を知りなさい」

「違うよ! きつと健康的で奥ゆかしい子だったんだよ! じゃないと、私も無視された事になっちゃうじゃん!」

「ちーちゃん……」

結衣が悲しげに目を伏せた。

「比企谷……。私ともアドレス交換するか? 私はちゃんとメール返すぞ? 寝たふりとかしないぞ?」

平塚先生が結衣の手から携帯を取り、自分のアドレスを打ち始めた。それを見ながら八幡はため息をついた。

白猫と進路と女子三人の勉強会

部室。八幡は小町に借りた少女漫画を読み、雪乃は小説、結衣は携帯、千尋もスマホ。ただダラダラしていた。すると、八幡の携帯がブーツと震えた。LINE通知が来ていた。千尋からだ。

『白猫 激闘☆9 ブレイクスルー』

心の中で「了解」と呟くと、それに参加する。そんなことをやっていると、結衣の方から「うわっ」と嫌そうな声が聞こえた。

「どうしたの?」

雪乃が声を掛けた。

「ううん。ちよつと嫌なメールが来て……」

「比企谷くん。裁判沙汰になりたくなかったら、今後そういう卑猥なメールを送るのはやめなさい」

「俺じゃねえよ……。証拠はどこにあんだよ。証拠出せ証拠」

「うわっ……。犯人っぽい台詞。つて、ホーネット。八幡任せた」

「そうね。その言葉がほとんど証拠と言っているわね。『証拠はどこにあるんだ』『大した推理だ、君は小説家になんていられるか』『最後、むしろ被害者の台詞だろ……』」

「そうだったかしら?」

指摘されて、読んでいた本をパラパラとめくる雪乃。

「いやー。ヒッキーは犯人じゃないと思うよ?」

結衣が言うと、「証拠は?」とでも言わんばかりに雪乃が聞いた。

「んー、なんちゆうかさ、内容がうちのクラスのことなんだよね。だからヒッキーは犯人じゃないと思うよ」

「いや俺も同じクラスなんだけど……」

「なるほど。では、犯人は比企谷くんではないわね」

「証拠能力認めちゃったしよ……」

げんなりする八幡。

「……ま、こういうの時々あるしき。あんまり気にしないようにする」

言うのと、結衣は携帯をしまい、んーつと後ろに伸びをする。

「……暇」

「することがないのなら勉強でもしていたら？中間試験まであまり時間もないことだし」

雪乃が言うのと、結衣は少し不満そうな顔を浮かべた。

「勉強とか、意味なくない？社会に出たら使わないし……」

「出た！バカの常套句！」

あまりの予想通りの返しに、八幡は思わず声に出してしまった。

「勉強なんて意味ないってば！高校生活短いし、そういうのにかけてる時間もつたないじゃん！人生って一度きりしかないんだよ？」

「だから失敗できないんだけどな」

「超マイナス思考だ！」

「リスクヘッジと呼べ」

「あなたの場合、高校生活全部失敗してるじゃない……」

「流石に将来専業主夫とかいうのはねえ……」

「早川、お嫁さんのお前に言われたくない。あと失敗なんてしてねえ。ちよつと人と違うだけだ。個性だ！みんな違ってみんないいんだ！」

「そ、そう！個性！勉強が苦手なのも個性!!？」

2人揃ってバカの常套句を聞いて、雪乃も千尋もため息をついた。

「由比ヶ浜さん。あなた、さつき勉強なんて意味ないって言っていたけれど、そんなことはないわ。むしろ自分で意味を見出すのが勉強というものよ。それこそ人それぞれ勉強する理由は違うでしょうけれど、だからと言ってそれが勉強を否定することにはならないわ」

「そうだよ。将来、どんな職業についてもまず基盤となるのは勉強なんだから。逆にどんな職業に就きたいかも、勉強で決まることだってあるんだしさ」

「その結果がお嫁さんなんだよなあ……お前の場合」

八幡に痛いところを突っ込まれ、ジト目で睨む千尋。

「ゆきのんは頭からいいけどさ……。あたし、勉強に向いてないし……周り、誰もやってないし……」

すると、雪乃の目がキュツと細くなった。それを察して結衣は自分

のフォローに入る。

「や、ちや、ちゃんとやるけどー！そ、そういえば、ヒッキーは勉強してるの!?？」

「俺は勉強してる」

「裏切られたっ！ヒッキーはバカ仲間だと思ってたのに！」

「俺は国語なら学年3位だぞ……、他の文系教科も別に悪くねえ」

「うっそ……全然知らなかった……。ちーちゃんは？」

結衣は矛先を千尋に向けた。

「いや、私転校生だし……」

「高2から進学校である総武高校に編入して来た点を考えれば、成績は良い方なのではないのかしら？」

雪乃が補足すると、結衣はガツクリと項垂れた。

「ううー。あたしだけバカキャラだなんて……」

「そんなことないわ、由比ヶ浜さん」

「ゆ、ゆきのん！」

「あなたはキャラじゃなくて真性のバカよ」

「うわーん！」

ぽかぽかと雪乃の胸を叩く結衣。

「試験の点数や順位程度で人の価値を測るのがバカだと言っているのよ。試験の成績は良くても人間として著しく劣る人もいるわ」

「おい、なんでいた俺見たんだよ。一応言っておくが俺は勉強好きでやっってるんだからな？」

「へえ……」

「勉強くらいしからすることなかったのよね」

「まあ私も友達いないの誤魔化しすために休み時間に勉強とかよくやるし……」

「まあな。お前らと一緒に」

「……否定はしないけれど」

「そこは否定しようよ！なんだかあたしが悲しくなってきたよ
！」

ヒシッと雪乃に抱きつく結衣。そして、そのままの体勢でふと口を

開いた。

「でもさあ、ヒツキーが勉強頑張ってるのってなんか意外だよな」

「いや、他の連中も進学希望ならもうこの時期勉強してるんじゃないの。夏休み入ったら夏期講習とか行く奴もでてくるだろうし」

「八幡は行くの?」

千尋が隣で聞いた。

「おう。俺は予備校のスカラシップ狙ってるしな」

「……すくらつぷ?」

「それなら狙わなくても今現在で十分よ。生ける産業廃棄物みたいなものじゃない、あなた」

「結衣、スカラシップだよ。言い間違い一つで八幡の心が削れるから気を付けて」

とりあえずそこを注意する千尋。

「スカラシップってのは奨学金のことだ。最近の予備校は成績がいい生徒の学費を免除してくれるんだよ。つまり、スカラシップを取って、さらに親から予備校の学費を貰えばそれがまるまる俺の金になるわけだ」

それを聞いた瞬間、女子三人は微妙な表情を浮かべた。

「詐欺じゃん……」

「結果的に授業の履修はできるわけだから、ご両親も損をしているとは言いつれないし、予備校側もスカラシップ生が入ってきているわけだから問題ないわ。絶対的に詐欺と言いつれないのがこの男の性質の悪いところよね」

「いやいや、双方が損してなければいいってわけじゃないでしょ。マジで生けるスクラップじゃん八幡」

と、三人から心を袋叩きにされ、八幡は少し傷ついた。それを無視して結衣は呟いた。

「進路、かあ……。みんなは大学とか決めてるの?」

その問いにまず反応したのは雪乃だ。

「いえ、まだ具体的には。志望としては国公立理系だけど」

「頭いい単語がでてきた!ちーちゃんは?」

「んー、私も具体的には決まってるないけど文系かなあ」

「それならいけそう！ヒツキーは？」

「俺は私立文系だ」

「うん！それなら……」

「おい、文系は頭悪いって意味じゃねえぞ。そもそも俺や早川とお前じゃレベルが違うだろ」

「うっ……。だ、だから頑張るんだってば！」

そういうと、雪乃から離れて結衣は高らかに宣言した。

「と、いうわけで。今週から勉強会をやります」

「………どういうわけ？」

「テスト一週間前は部活ないし、午後暇だよね？ああ、今週でも火曜日は市教研で部活ないからそこもいいかも」

と、スイスイと予定が決定していく中、八幡はどう断ろうか考えていた。

「あー……」

とりあえず何か言つとこうと思った時だ。

「ゆきのんとちーちゃんの三人でお出掛けって初めてだね！」

「そうかしら？」

「そういえばそうかも」

最初から誘われてなかった。とりあえず、絶対負けないと心に誓う八幡だった。

勉強会と小町

中間試験二週間前の火曜。市教研のため、学校は早く終わり、それを利用して雪乃、結衣、千尋の三人は近くのファミレスに入った。「いやー、誰かと勉強するのって憧れてたんだよねー。今までずっと1人だったからさ。その分捗ったけど」

「それでいいのよ。勉強というのは本来、1人でやるものだから」

「おっ、流石優等生。言うことが違うね」

「……何か他意を感じる言い方ね」

「へ？他意なんてないけど……」

なんて話しながら席に向かった。

「ゆきのん、サイゼじゃなくてごめんね。ミラノ風ドリアはまた今度だね。あ、あとディアボラ風ハンバーグがおすすめだったんだけど……」

「私は別にどこでも構わないわ。やることは同じなもの。……それにしても、ハンバーグってイタリア料理だったかしら」

そんな話を話していると、通り掛かった席に見覚えのある男がいた。

「あー！」

「あら」

「げっ」

「おっ」

八幡だった。4人揃って固まった。が、すぐ再起動したのは千尋だった。

「よーっす、八幡。どしたのこんな所で」

「や、勉強だけど……」

「じゃあ一緒に勉強しようよ。私達も勉強するつもりだし。2人ともいいっ……」

「あたしはいいよ」

「私も構わないわ。やることに変わりはないし」

「そうだよな。することは同じだし」

その言葉に、結衣が「ん？」と一瞬小首を傾げたが、すぐに「決まり」と言つて、八幡の隣に座つた。それにならつて、奥に千尋、雪乃と座る。

で、追加のドリンクバーを注文した。

「あ、私取りに行くよ。みんな何がいい？」

「あたしコーラ」

「私は紅茶」

「俺はアイスコーヒー。ガムシロとミルク多めで」

「了解。雪乃ごめんね、ちよつと退いて」

「いえ、私も手伝うわ。1人で4人分は大変でしょう？」

「お、サンキュー」

と、2人はドリンクバーへ。千尋が自分の分とアイスコーヒーをゴーツとコップに注いでると、エスプレッソマシンの前で何故か小銭を握り締めた雪乃が立っていた。

「ね、ねえ、早川さん。お金はどこに入れるのかしら？」

「は？」

「だからお金よ」

「……ドリンクバー知らないの？」

「ど忘れしただけよ」

いや忘れるようなものじゃないでしょ……と、心の中で千尋はツツコミを入れつつ、目線で「見てて？」と雪乃に言った。で、結衣のご注文のコーラのボタンを押した。

「……なるほど」

言いながら雪乃もコップをセット。だが、手が止まる。

「……早川さん、紅茶はないのかしら？」

「あ、ごめん。紅茶は隣のエスプレッソマシンで……」

と、お湯を注いだ後にティーパックの袋をカップの下の皿に添えた。

「これをあとは席でツイツイすれば終わり」

「ありがとう、助かったわ」

で、雪乃は自分と結衣の分のドリンクを持ち、席に引き返した。そ

の後に続く千尋。全員の前にドリンクを置くと、「んじや、始めよつか」と結衣が言った。

それを合図にしたかのように雪乃と千尋はヘッドホンを装着し、八幡はイヤホンを耳につけた。

「はあ!?!?なんで音楽聴くのよ!!?!?」

それを見て結衣が驚愕の声を上げた。

「や、勉強の時は音楽聴くだろ。雑音消すために」

「そうね。それに音楽が聞こえなくなってくると、集中してる証拠になつてモチベーションも上がるし」

「違うよ!勉強会つてこうじゃないよ!」

「ちよつと落ち着いて結衣。周りのお客さんにも私達にも迷惑」

机をバンバン叩く結衣に千尋がやんわりと注意した。

「じゃあ、どういふのが勉強会なの?」

真面目な顔で聞く雪乃。すると、落ち着いた結衣は顎に人差し指を当てて答えた。

「それは……出題範囲確認したり、わからないところ質問しあったり、あとは休憩挟んで、相談したり、情報交換と……あとは、雑談もするかなあ」

「ただ喋ってるだけじゃねえか」

「そんなのがいたら勉強にならないよ」

八幡と千尋が呆れたように言った。

「そもそも、勉強という行為自体が、1人でやるようにできてるのよね」

雪乃に極めつけの一言を言われ、結衣が打ち砕かれた。最初は渋っていたものの、他三人が黙って勉強を始めたので、仕方なさそうに始めた。

勉強し始めて1時間くらい経った頃だろうか、黙々と勉強していた千尋と雪乃の耳にすごい声が聞こえた。

「馬鹿な!俺は断じてシスコンなどではない。むしろ妹としてではなく、1人の女性として……!」

と、聞こえた時点で千尋は音楽の音量を上げ、雪乃は驚愕と恐怖の

入り混じった顔でフォークとナイフを構えた。

「……ああ、もちろん冗談です。やめろ、武装すんな」

「あなたが言うど冗談に聞こえないから怖いわ」

「てか、何があつたの？」

雪乃までもが会話に加わり、1人だけ勉強を続けるのはどうなのか
と思ひ、千尋も参加した。

「いや、妹が正体不明の男と……」

「小町ちゃんが？」

「あれ、ちーちゃん小町ちゃん知ってるの？」

結衣が千尋に聞いた。

「うん。前、八幡の家に行った時に少しね」

「あ、遊びに行ったの？」

「えっ、なんで？」

結衣の目がジト目になる。

「いや、遊びにというか、前に材木座くんの小説の時に家が隣同士だからちよつと相談に行つただけだよ」

「……………」

そのままジーツと千尋を睨む結衣。

「と、とにかく！そんなに小町ちゃんが気になるなら家で聞いてみればいいんじゃないの？」

千尋が逃げるように結論めいたことを言つて、再び勉強に戻つた。

闇の時間と剣豪將軍とラーメン

夜。八幡はベッドの中に入った。明日も学校なので、寝ようとしたからだ。だが、ヴーツと携帯が震えた。

「！ 早川か」

ちーちゃん 『ホラー映画見て眠れなくなった』 23：18

「いや知らねーよ……」

そう思ったので、そのまま返した。

比企谷 『いや知らねーよ』 23：19

ちーちゃん 『眠れるまで相手して』 23：19

比企谷 『なんで俺なんだよ』 23：19

ちーちゃん 『結衣も雪乃も寝てるっぽい』 23：19

比企谷 『ざけんな。俺もこれから寝るんだよ』 23：19

ちーちゃん 『ええー……けちんぼ』 23：20

比企谷 『あざとい』 23：20

ちーちゃん 『あざとい?』 23：20

比企谷 『なんでもない。おやすみ』 23：30

ちーちゃん 『あーそうですすかわかりましたよー。今からメチャク

チャLINE送り付けて嫌でも眠れなくしてやる』 23：30

八幡は通知をオフにして寝た。

×××

翌日の放課後。奉仕部室。

「ふむん……。闇の時間が、始まるか……」

部室の真ん中で材木座は1人呟いた。

「封印を、外すときが来たようだな……」

そうは言うものの、奉仕部メンバーは反応しない。完全に黙殺して読書が続ける雪乃、「え、えつと……」と戸惑う結衣、少女漫画を読む八幡、机の上で気持ちよさそうにいびきをかいてる千尋。

八幡は仕方なきさうにため息をついた。

「何か用か？材木座」

「ああ、いやすまんな。つい良いフレーズが出てきてしまったものだから、その五感とリズムを確かめるために無意識に口に出していたよ。うだ。ふっ、やはり我は骨の髄まで作家というのかな……。寝ても覚めても小説のことを考えてしまう。作家とは因果なものだ……」

うへえ、と嫌そうな顔をする結衣と八幡。すると、髪を払いながら雪乃が顔を上げた。

「作家って何かを作り出す人だと思っていたけれど……。何か作ったのかしら？」

「んがつぐぐっ！」

こうかはバツグンだ。って感じで、材木座は大きく体を仰け反らせた。

「……ほむん、そう言っていられるのも今のうちだけだ……。我はついに手にしたのだよ。エル・ドラドへの道をな！」

「なんだよ。受賞でもしたのか」

「いや、それはまだだ。だが、完成すればそれも時間の問題だろうな！聞いて驚け、此度の職場見学で出版社へと赴くことにしたのだ！つまり、コネクションを得たということだ！」

「おい、幸せ回路すぎるだろ、その頭……。お前それ、不良の先輩が知り合いにいることを自慢する中学2年生以下のレベルだぞ」

八幡に指摘されるも、材木座は何やらぶつぶつと「スタジオは……キヤスティングは……」などと呟いている。その聴覚情報を八幡は遮断して少女漫画に目を落とした。

「むく……うるさあい……」

すると、千尋がお目覚めのようだ。材木座の演技のかかった奇声に目が覚めてしまったようだ。

「おはよう、ちーちゃん」

「んっ……」

「早川さん、この部室は仮眠室ではないのよ」

「だってしよーがないじゃん……。ホラー映画のせいで昨日の夜眠れ

なかつたんだもん……」

眠たげに目をこする千尋。

「そういえば、ちーちゃんは職場見学どうするの?」

「どうって……平塚先生の家だけど?」

「や、それはもうないから」

手を胸前で振る結衣。

「……あんまり言いたくないんだよね」

「へ?なんで?」

「あまり者同士組まされたからさ……」

遠い目をする千尋。それを見て八幡は察した。

「……あー」

「も、もしかして、前に苛めてきた人達と同じになっちゃったの?」

結衣が恐る恐る聞いた。が、千尋は首を横に振る。

「職場見学の日には剣豪將軍とデートだよ……」

「……」

結衣どころか雪乃までもが気の毒そうな顔をした。当の本人である材木座は未だに声優云々とブツブツ言ってる。

「じ、じゃあヒツキーは!?」

「自宅」

「や、だからないってば」

「んー、まあ同じグループの奴が行きたいところ行くんじゃないか」

「なんなん、その人任せ感」

「いや、昔からそうなんだが、余り者で入れられちゃうから発言権ねえんだよ」

「なるほ、あ、あー。や、ごめん」

さらに空気は重くなった。

「では由比ヶ浜さんは?もう決めたの?」

雪乃が聞いた。

「うん。一番近いところへ行く」

「発想が比企谷くんレベルね……」

「おい、一緒にすんな。俺は崇高なる信念のもとに自宅を希望したん

だぞ。つつーか、お前はどこ行くんだよ。警察？裁判所？それとも監獄？」

「はずれ。あなたが私をどう思っているのかよくわかったわ」

「真面目な所、検察官とかじゃない？ほら、久利生検事と性格は正反対だけど目指してるものは同じ、みたいな」

「興味ないことはないけど違うわ。シンクタンクか、研究開発職かしら。これから選ぶわ」

すると、結衣が千尋の袖を引っ張った。

「どしたの？」

聞くと、千尋の耳元に結衣は近付いた。

「しんくたんくって何？タンクの会社？」

「私も詳しくは知らないけど、何かしらの専門家とかが集まって調査とか研究する政策研究機関、だったと思うよ？」

「せ、せーさく……？」

「早川さん、その説明では由比ヶ浜さんでは理解出来ないわ」

「なんか馬鹿にされてない？」

結衣が悲痛な声を上げるが、それを無視して雪乃はシンクタンクの説明を始める。

八幡は時計を見た。そろそろ部活は終わりの時間だ。千尋も同じことを考えてたようで、時計を見た後八幡に言った。

「ねえ、そういうえばこの前美味しいラーメン屋さん見つけたんだけど、行かない？」

「やつ、この後用事あるから」

誘われたら断る、それが八幡の流儀だ。すると、千尋は携帯を取り出し、つついついッと操作する。そして、耳にスマホを当てた。

「もしもし小町ちゃん？私、千尋。この後さ、八幡って予定ある？……ない？というかあるわけない？分かった、ありがと。じゃね」

ピッ、と電話を切った。

「だってよ？」

「小町ちゃん……なんで言っちゃうの？」

思わず口に出してツツコむ八幡をよそに、千尋はマイペースに言っ

た。

「と、いうわけでラーメン屋行こっか？」

「ま、待った！」

そこに口を挟む結衣。

「あ、あたしも、行ってみたい、かも……」

「うん。いいよ。雪乃は？」

「私は遠慮しておくわ。ラーメンはあまり食べたことがないし」

「えーゆきのんも行こうよー」

などと、話が段々と広がっていく中、八幡はどうしようかため息をつく。その時だ。コンコンとノックの音が聞こえた。

「こんな時間に……」

雪乃は思わず小声でボヤいたものの、「どうぞ」と言った。爽やかな笑みとともに入って来たのは、葉山隼人だった。

葉山の悩みとチエーンメール

「こんな時間に悪い。ちょっとお願いがあつてさ」

葉山はそうにこやかに言うと、ごく自然に「ここいいかな？」と椅子を引いて、エナメルを横に置いて座った。

「おーっす、葉山くん！」

「やあ、千尋」

「どしたの？こんな時間に」

「奉仕部ってここでいいんだよね？平塚先生に悩みを相談するならここだって言われてきたんだけど」

「うん。ここだよー」

「結衣もみんなも、この後に予定があるからまた改めるけど、大丈夫か？」

「や、やー。そんな全然気を遣わなくても。隼人くん、サッカー部の次の部長だもんね。遅くなつてもしょうがないよ」

結衣が微笑みながら言った。

「材木座くんもごめん」

なんと、材木座にまで声をかけた。

「ぬっ!?ふ、ふぐっ！あ、いやぼくは別にいいんで、あの、もう帰るし……」

そう言うと、そそくさと部室から出て行った。

「それと、ヒキタニくんも。遅くなっちゃってごめん」

「……………いや、別にいいんだけどよ」

「へっ?」

千尋が思わず声を上げた。

「……………ヒキタニって…………あれ、ヒキタニって読むの!??ごめん、今までー」

「いや違うから…………」

「あれっ、ヒキタニじゃないの?」

そこでようやく千尋は自分のミスに気付いた。

「あの、ほんとごめん……」

「そうやって謝るな。それが一番辛いことをお前はよく知ってるはずだ」

その通りだった。なんとなく空気が重くなるが、それをまったくモノともせずに雪乃が言った。

「それで、何かご用？葉山隼人くん」

「ああ、それなんだけどさ」

葉山は言いながら携帯を取り出す。そして、その画面を雪乃に見せた。それを横から覗き込む千尋。

『戸部は稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしていった』

『大和は三股掛けてる最低の屑野郎』

『大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーをした』

結衣の所にも来ていたみたいで、結衣は八幡に見せた。

「この前の……」

「チエーンメール、ね」

「懐かしいなあ、私の所に『早川千尋はヤリマンビッチ』なんてメールが来た時は笑いが止まらなかったわー」

「……………」

全員が黙って顔を伏せた。葉山がなんとか取り繕い、言った。

「これが出回ってからクラスの雰囲気も良くなってき、それに友達のこと悪く言われれば腹も立つし。止めたんだよね。こういうのってやっぱりあんまり気持ちがいいものでもないしさ」

そう言ってから、さらに明るく付け足した。

「あ、でも犯人を探したいわけじゃないんだ。丸く収めたいんだ。頼めるかな」

「つまり、事態の收拾を図ればいいのね？」

「うん、まあそういうこと」

「なるほど、では犯人を探すしかないわね」

「うん。よろし……えっ!??なんでそうなるの?」

思わず聞き返す葉山。

「チエーンメール……。あれは人の尊厳を踏みこむ最低の行為よ。自分の名前も顔も出さず、ただ傷つけるためだけに誹謗中傷の限りを尽くす。悪意を拡散させるのが悪意とは限らないのがまた性質が悪いのよ。好奇心や時には善意で、悪意を周囲に拡大し続ける……。止めるならその大元を根絶やしにしないと効果がないわ。ソースは私」
「お前の実体験かよ……」

八幡が呆れたように声を漏らした。

「まったく、人を貶める内容を撒き散らして何が楽しいのかしら。それで佐川さんや下田さんにメリツトがあつたとは思わないのだけだ」

「犯人特定済みなんだ……」

結衣も引き攣った笑みで言った。

「とにかく、そんな最低なことをする人間は確実に滅ぼすべきだわ。目には目を、歯には歯を、敵意には敵意をもって返すのが私の流儀」

「あ、今日世界史でやった！マグナ・カルタだよね！」

「ハムラビ法典よ」

さざりと切り返すと葉山に向き直った。

「私は犯人を捜すわ。一言いうだけでぱったり止むと思う。その後どうするかはあなたの裁量に任せる。それで構わないかしら？」

「……ああ、それでいいよ」

観念したように葉山が言った。雪乃も大変だったんだなあ……と、千尋はしみじみと思った。

で、早速、詳しい話を聞くことになった。

「メールが送られたのはいつからかしら？」

「先週末からだよ。なあ、結衣？」

葉山の問いに結衣は頷いた。

「先週末から突然始まったわけね。クラスで何かあったの？」

「特に、無かったと思うけどな」

「うん……いつも通りだったね」

葉山と結衣が言った。

「一応聞くけど、早川さんは？」

「えっ？そ、そう言われても……」

「三浦さん達とご飯を食べてたのでしょうか？」

「特に何も無かったと思うけどな」

「あなたは？」

「聞く順番おかしくない？」

そこを注意しておいて、八幡は考えた。

「昨日はあれだ、職場見学のグループ分けするって話があった」

「うわ、それだ」

「え？そんなことか？」

結衣のセリフに、八幡と葉山の台詞が重なった。すると、葉山はわざわざ八幡に向き直って、ニカツと笑って「ハモったな」と言った。

「お、おう」と返すしかない八幡。

「いやーこういうイベントのグループ分けはその後の関係性に関わるからね。ナイーブになる人も、いるんだよ」

なるほど……と、千尋は顎に手を当てて考えた。

「仮にそれが合つてるとしたら、犯人つてその三人のウチの誰かって事になるね」

「えっ!?？な、なんでそうなるの？」

「だって、悪く言つたのつて自分を職場見学のグループからあぶれさせない為に仕組んだんでしよう？」

「で、でもさ、三人を悪く言う内容なんだぜ？三人は違うんじゃないか？」

「はっ、バカかお前は。どんだけめでたい奴なんだよ、正月か。そんなの自分に疑いが掛からないようにするために決まってるだろうが。ま、俺なら誰かあえて1人を悪く言わないで、そいつに罪をなすりつけるけどな」

八幡がドヤ顔で言った。

「ヒッキーすこぶる最低だ……」

「知能犯と呼べ」

八幡が胸を張る横で、葉山は悔しそうに下唇を噛んだ。

「ま、まあ葉山くん。まだ三人が犯人と決まったわけじゃないから。」

偶然、職場見学と時期が被ったってだけかもしれないし……」

「けれど、他の手がかりがない以上はその線から探すしかないわ」

そう言うのと雪乃は葉山を見た。

「それでは、その三人のことを教えてもらえるかしら？」

「わかった。戸部は、そうだな。俺と同じサッカー部だ。金髪で見た目は悪そうに見えるけど、一番ノリのいいムードメーカーだな。文化祭とか体育祭でも積極的に動いてくれる。いい奴だよ」

「騒ぐだけしか能がないお調子者、ということね」

「……………」

「どうしたの？続けて」

「…………大和はラグビー部。冷静で人の話をよく聞いてくれる。ゆったりしたマイペースとその静かさが人を安心させてくれるっていうのかな。寡黙で慎重なんだ。いい奴だよ」

「反応が鈍い上に優柔不断……………」

「……………」

葉山は何も言わなかった。が、なんとか次の紹介もする。

「大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの味方をしてくれる気の良い性格だ。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、いい奴だよ」

「人の顔色を窺う風見鶏、ね」

「……………」

気付けば結衣も八幡も千尋も引いていた。

「…………誰が犯人でもおかしくないわね」

お前が一番犯人っぽいわ、という言葉を八幡と千尋はなんとか口に出さずに呑み込んだ。

海老名さんとBLと友達の友達

翌日、八幡は三浦グループを横目で見ていた。昨日の会議は結局、葉山の話はあてにならない、という雪乃の判断の元、八幡と結衣と千尋でそれぞれ調べることになった。

「とりあえず、あたしがいろいろ聞いてみる。だ、だから、ヒツキとちーちゃんとは全然無理とかしなくていいから。むしろなんもしなくていいから!」

「あ、ああ。そりや助かるけど……」

「ていうか私も何もしないの?」

「と、とにかく!あたしだけでやるから!」

そんなわけで、結衣と千尋は優美子達の群れに入っていった。

(まあ、何もしなくていいって言ってたし、結衣に任せようか。最悪、八幡もいるし)

千尋はそう思った。一方、八幡は、

(まあ、早川もいるし、大丈夫だろ)

お互いに、ザ・人任せだった。

「お待たせー」

「よーっす」

「あ、ユイー。千尋。おっそいからー」

優美子が返した。隣には海老名さんがいる。

「てかさー、とべつちとか大岡くんとか大和くんとか最近微妙だよねー。なんかこうアレな感じ?っていうか」

「ぶふっ!」

千尋は思いつきり噴いた。八幡もだ。直球だった。それも一六〇キロのジャイロボール。

「え……ユイってそういうこと言う子だったっけ……」

一歩引いたのは海老名さんだ。その瞬間、千尋は切り離し作業に入った。海老名さんの方へ一歩引き、困惑してるような表情を作った。

「あんさー、ユイ。そういうのってあんまよくなくない？トモダチのことそう言うのってやつばまずいっしょー」

優美子に言われて、むしろ結衣がハブかれるピンチに陥っていた。「うっ……」

助けてみたいな視線を千尋に送る結衣、仕方ないので千尋は言った。

「あー微妙って、アレ？結衣誰かのこと気になってんの？」

「はあっ!!?」

過剰に反応する結衣。その瞬間、優美子がニイツと笑った。

「なに、あいつらの誰か好きなん？」

「全っ然違うー！気になる人はいるけど……、それはアレな人だし……。はっ!!?」

しまった！という顔をみせる結衣。

「え、ユイ……、誰か好きな人できたん？言ってみ？ほれほれ。協力するから」

「だ、だから！そうじゃなくてっ！気になるのはあの三人の関係性？っっていうの？なんか最近妙だなーっと思うの」

「んだ、それか。つまんねー」

あからさまに興味を失う三浦。結衣が恨みがましい視線を千尋に送るが、目を逸らした。

「わかる……。ユイも気になってたんだ……。実は、あたしも」

隣の海老名さんが食いついた。

「そうそうー！なんかギクシヤクしてるっっていうかさー！」

「私思うんだけど、わたしの絶対とべっち受けだと思っの！で、大和くんの強気攻め。あ、大岡くんは誘い受けね。あの三角関係絶対なんかあるよー！」

「あー、わかるわか、……うえ？」

「でもね、でもね！絶対三人とも隼人くん狙いなんだよ！くうく、友達のためにみんな一歩引いてる感じ、キマしたわあ〜!!?」

そのままぶはっ！と鼻血を噴出。結衣も千尋も何も言えずに戸惑っていると、優美子が慣れた感じでティッシュを取り出した。千尋は

LINEを開いて、八幡に「後は任せた」と送った。八幡は人間観察を始めた。

×××

放課後、部室に集まった。奉仕部+葉山。

「どうだったかしら？」

「ごめん！一応女子に聞いたんだけど全然わかんなかった！」

結衣が素直に謝った。

「早川さんは？」

「同じ、あれから鼻血の処理やらBLの基本やらでそれぞれころじやなかったもんね

「……そう、それならそれで構わないわ」

「え、いいの？」

結衣が聞き返した。

「逆に言えば女子たちは今回のことに刺して興味を持ってない。ってことよ。そうなるよ、葉山くんたち男子の問題ってことになるわ。由比ヶ浜さん、早川さん、ご苦労様」

「ゆ、ゆきのん……」

感動のあまり、結衣は雪乃に飛びついたが、ぬるつと躲されて壁におでこをぶつけていた。

「で、あなたの方は？」

「悪い、犯人の手掛かりは掴めなかった。でも一つわかったことがある」

すると、雪乃も結衣も千尋も葉山も聞く姿勢になる。

「何がわかったのかしら？」

「あのグループは葉山のグループだってことだ」

「はあ？今更何言ってるの？」

「えっと、ヒキタニくん、どういう意味？」

結衣、葉山と聞いた。

「ああ、言い方が悪かった。葉山の、って言葉は所有格だ。つまり、葉

山のもの、葉山のためのものって意味なんだよ」

「や、別にそんなことないと思うけど……」

「葉山、お前はお前がいけない時の三人を見たことあるか？」

「いや、ないけど……」

「だから葉山は気づいてないだけだ。はたから見てるとあいつら三人きりのときは全然仲良くない、わかりやすく言えばだな、あいつらにとって葉山は友達で、それ以外の奴は友達の友達なんだよ」

「あーそれ分かる。会話回してる中心の人がいなくなると気まずいよね。何話していいかわかんなくて携帯いじったりしちゃうんだよ」

結衣が思い当たる節があるのか、項垂れた。すると、雪乃が顎に手を当てて言った。

「仮に比企谷くんの言うことが正しかつたとしても、三人の犯行動機の補強にしなければならないわ。その犯人を消さない限り事態は収束しないわ」

「いや、そんな暗殺者みたいなこと……」

千尋が横から盛大に引いていた。その隣の八幡がさらに言った。

「いや、消すのはもつと別のもんだよ。葉山、お前が望むなら解決することはできるぞ。犯人を捜す必要もなく、これ以上揉めることもなく、そしてあいつらが仲良くなれるかもしれない方法が」

そう言う八幡の気持ち悪い笑顔を見て、結衣が「う、うわあ……」と引いた。それに構わず、八幡は聞いた。

「知りたいか？」

その問いに葉山は頷いた。

翌日。職場見学グループの一つに、戸部、大和、大岡の三人グループが出来上がっていた。

テスト期間と川崎沙希の行方

中間試験まであと残りわずか、千尋はあまり勉強をするタイプではない。試験前でも1日3時間程度しかやらない。だから、家でのんびりと勉強していた。

で、そんな日の中の放課後。帰ろうとしてると、ヴツヴツと八幡からLINEが来た。

「うっわ……懐かしい」

テスト期間が始まってからはほとんど奉仕部メンバーとは会ってなかったため、ついそんな感想が漏れた。

比企谷八幡『部室集合』

八幡に、それもテスト期間中に呼び出されるなんて何事かと思っただが、とりあえず部室に向かった。

「よーつす」

中に入ると、八幡、結衣、雪乃といった奉仕部メンバーの他に戸塚がいた。

「どしたの？また勉強会？てかなんで戸塚くんいるの？」

「いや、テスト期間中に悪いんだが、奉仕部の依頼だ。あと戸塚は助手的なお手伝いだ」

その問いに八幡が答えたが、さらに千尋は首を傾げた。

「はあ？こんな時期に誰かここ来たの？」

「いや、この学校の生徒の相談つてわけじゃねえんだ」

で、八幡は川崎大志と川崎沙希のことを話した。最近、沙希の方が不良化（仮）したらしく、帰りもかなり遅いらしい。帰りが遅い理由はバイトのようで、「エンジェルなんとか」という店から電話が来たようだ。そこで、何をしているか突き止めたい、とのことだ。

「ふうーん……」

「だから、お前にも少し考えて欲しくてな」

「既にアニマルセラピーという方法を試してみたのだけれど、川崎さんが猫アレルギーみたいで中止したのよ」

追加で雪乃が説明をした。

「てかなんでアニマルセラピー？」

「人の道を外れた人は純粋な動物の心で癒すものよ」

「いや深夜のバイト程度で大袈裟でしょ……」

呆れたように千尋は言った。

「てか、そんなのしずちゃんに相談すればいいじゃん」

「おい、平塚先生をそんな若々しい呼び方してやるなよ。年齢と噛み合わなくて泣くぞ」

「いやあんたのその台詞で泣くよ」

八幡の酷い言い草にとりあえずツツコンでると、結衣が遠慮気味に言った。

「それも試したんだけど……」

「ちよつと、あれはね……」

思い出したくないことなのか、結衣と隣の戸塚がふつと目線を逸らした。既に試して失敗しているようだ。

「なら、いつそのことストーキングすればいいじゃん。何処で何してるかくらい、尾行すればすぐでしょ」

「深夜まで私達くらいの年齢の学生が徘徊していたら、警察沙汰よ」

雪乃がそう反論した。

「捜査は足と根性でしょ。アンパンと牛乳用意してさ」

「向こうを更正させるのにこちらも警察のお世話になるような事をするのでは説得力がなくなるわ」

「………確かに」

思わず本気で納得してしまった。どうやら雪乃は先の事まで考えているようだった。

「それなら、そのエンジェルナントカって所に行ってみればいいんじゃないの？」

「いや、でもそんな店知ってる人いるの？」

結衣に聞かれた。

「誰か知らないの？」

千尋が聞くと、雪乃も結衣も戸塚も首を横に振った。当然、千尋も

知らない。すると、「あっ」と八幡が声を漏らした。
「そーい、知ってそーな奴がいるわ、1人」
との事なので、そいつに八幡はメールを試してみた。

雪乃と結衣と千尋とメイドさん

千葉駅前。メイド喫茶『えんじえる』。ここに来た理由は、千葉に「エンジェル」という文字が付く店はここしかないからだ。

「千葉にメイドカフェなんてあるんだ……」

結衣が物珍しそうにへーと眺めている。

「知らなかったの？私が千葉に来て最初に入った店ここだよ？」

「……………えっ」

八幡と結衣がドン引きしたように声を漏らした。

「ち、ちーちゃんつてもしかして……………そっちの人なの？」

「違うよ。……………うちの父親がこっそり行くのを見かけてさあ、弱みを握ろうと思つて入っただけ」

「……………お前ん家の父親も父親だな」

八幡が隣で呟いた。

「でも、ぼく、あんまり詳しくないんだけど……………その、メイドカフェってどういうお店なの？」

戸塚が看板の文字を見ながら困ったように言った。

「いや実は俺もよく知らないんだ。で、まあそういうのに詳しい奴を呼んだんだが……………」

「うむんお、呼んだか、八幡」

「うわ……………」

材木座が現れ、結衣と千尋と八幡があからさまに嫌そうな顔をした。

「……………自分で呼んでおいて何故そんな顔をするのだ」

「いや、早川がこの手の店行ったことあるならお前いらなかったなつて思つて」

「それはつまり、剣豪將軍よりも千魔の魔女の方が強力と言いたいのか？」

「いや違えーよ。あと早川、鉄パイプはしまえ。てかどこから持つて来たのそれ」

言われて千尋は鉄パイプを元の場所に戻して来た。

「材木座、本当にこの店なんだろうな」

「ああ、間違いない。この通り、市内にある候補は二つ。そして、川崎沙希なら間違いないくこちらを選ぶと私のゴーストが囁いている」

「どうして分かるんだ？」

「まあ、黙って我についてこい……。メイドさんにちやほやしてもらえろぞ」

言われて、八幡の表情はおもわず明るくなった。すると、その八幡のブレザーの裾を結衣が引っ張った。

「……………」

「……………なんだよ」

「べつにー。ヒツキーもそういうお店行くんだなって思って。……なーんか、ヤな感じ」

「……………いや、意味わかんないし。主語述語目的語使って話せつつーの」「てかさ、これって男の人が行くお店じゃないの？あたしたち、どーすればいいの？」

結衣が聞くと、材木座が眼鏡を中指で直した。

「案ずるな女郎」

「誰がメロンよ……………」

「そこがだよー！」

「ち、ちーちゃん!!?」

急に過剰に反応する千尋にビクツとする結衣。

「こんなこともあるのかと潜入捜査用にメイド服を持って来ている」

「じゃ、戸塚くん。ゴウ」

「え。なんでぼく……………」

千尋に言われて戸塚はジリジリと下がった。それを追うように材木座はジリジリと近付いた。

「さあ戸塚氏……………、さあ、さあさあさあさあつー！」

「い、いや……………やだ……………」

まるで、というかどう見ても犯罪臭のする絵面だった。その時だった。

「はいはいはい！あたし着てみたい！」

結衣が元気良く手を挙げた。すると、材木座が唾を吐き、千尋は「はーあ……」とため息をついた。

「え、何その態度。ちーちゃんまで……」

「ふん、メイドとはそういう存在ではない。貴様の言うメイドはただのメイドコスだ。魂が入っていない」

「そうだね。なんていうか……ダメだよね全然、分かりにくいかもしれないけど、チョッパが好きっただけでワンピース詳しいとかほざくタイプの奴を見てると同じ感覚だよね」

「何言ってるか全然分かんないんだけど……」

結衣が助けを求めるように八幡を見た。

「いや、俺には分かる。なんというか、お前がメイド服を着ても全然ダメだ。なんか学祭のノリで着てる、イラつとくるタイプの大学生にか見えない」

「コスを着るなら心まで着飾れ！『シャーリー』を読んでから出直してこい！貴様のような輩がコミケでミクコス着てるのに喫煙所で平気でタバコを吸っていたりするのだ！」

熱弁されて、結衣は「うー」っと悔しそうに唸ると、雪乃の後ろに逃げ込んだ。すると、短いため息をついた雪乃が店の看板を指差した。

「ここ、女性も歓迎しているみたいよ」

『女性も歓迎！メイド体験可能！』

方針が決まった。

×××

とりあえず、男女6名でご入店した。

「おかえりなさいませー！ご主人様！お嬢様！」

と、おなじみの挨拶をいただき、雪乃と結衣と千尋はメイド体験に向かった。男子三人は席に案内される。

「じゃあお嬢様達には、こちらを着てもらいます。着方が分からない

かったら、いつでも呼んでくださいね」

てなわけで、着替え開始。の前に、雪乃と千尋はシフト表を見に行った。

「…………川崎さんの名前はないわね」

「ハズレかあ」

2人してため息をついたときだ。後ろからのんきな声が聞こえた。

「ねえ2人とも！早く着替えようよ！」

もはや目的を忘れている結衣だったが、ここまで来て「やっぱりいいです」なんて言えないので、着替えることにした。

早速、全員で着替え始める。上半身のブレザーとブラウスを脱いだ所で、千尋が固まった。なぜなら、目の前に自分と違って育ちのいい胸があったからだ。

それを見るなり、悲しげに目を伏せた。自分の胸部にある胸は平だった。鍛えて初めて胸が出てくる感じ（※ただし、大胸筋）。

「…………裏切り者がアアアアアアツツ!!？」

「な、何?!?ちーちや…………きやあああ！」

「バカやってないでさっさと着替えなさい」

冷ややかに後ろから雪乃に言われたので、2人はさっさと着替えなさい。

×××

八幡達が注文した飲み物を運ぶことになった。一番最初に着替え終えた結衣が八幡たちの元に飲み物を運んだ。

「お、お待たせしました。…………ご、ご主人様」

真つ赤な顔でカップをトレーから取り、机の上に置いた。

「……………」

「に、似合うかな？」

控えめに聞きながら、くるりと回った。

「わあ、由比ヶ浜さん可愛いね。ね、八幡？」

「ん？あ、ああ。まあ、な」

戸塚に言われてようやく頭が回り、生返事を返してしまった。

「そか……よかった……。えへへ、ありがと」

正直、八幡は驚いていた。アホっぽいのだが、しおらしくしてる態度と少し恥ずかしそうな表情が普段の結衣とは違った印象があった。「やー、でもさー、メイド服ってスカート短いし、ニーハイきついし、昔の人はこれ着て働いてて大変だったろーねー。これ着て掃除したらメイド服、クイックルワイパーみたいに埃まみれになっちゃいそう」

「お前、喋んなければいいのにな」

心の中で前言撤回する八幡だった。

「なっ!??どういう意味だっ!??」

それを聞くなり、スコーンとトレイで頭を叩く結衣。

「何を遊んでいるの……」

冷たい声をした。後ろには雪乃が立っていた。

「うわ、ゆきのん、やばっ!めっちゃ似合ってる。超きれい……」

結衣が感嘆の息を吐いた。そう言う通り、八幡から見てもとても似合っていた。

「いや、でもお前メイドさんっていうよりロツテンマイヤーさんって感じなんだけど……」

そうは言われたものの、雪乃も結衣も首をかしげるばかりで伝わっていなかったようだ。

「似合ってるってことだよ……」

「そう、別にどうでもいいけれど」

2人目だけで残りの1人が来ない。

「早川はどうしんだ?」

聞くと、雪乃と結衣は自分達が着替えて来たところを見た。

「……あれ?ちーちゃん遅いね?」

すると、別のメイドさんがやって来た。苦笑いで八幡達の所に来て言った。

「申し訳有りません、ご主人様。お連れ様はどうしても嫌だと言って、店の外で待っているそうです」

「は、はあ。そうすか。なんかすいません」

「いえいえ。それでは失礼いたします。ご主人様」

そう言うと、メイドさんは去って行った。

「……何があつたんだろうね？」

戸塚が聞くも、そればかりは本人に聞いてみないとわからない。

「それより、このお店に川崎さんはいないみたいね」

雪乃が言った。

「ちゃんと調べてたのか……」

「もちろん。そのためにこの服を着てるのよ」

「今日は休みとかじゃなくて？」

「シフト表に名前がなかったわ。自宅に電話が掛かってきていることから考えても偽名の線もないと思う」

すると、八幡は材木座を睨んだ。

「そうなるよ、俺たちは完全にガセネタに踊らされたことになるんだが」

「おかしい……そんなことはありえぬのに……」

材木座は一人で腕を組み、小首を捻り、唸っていた。

「何がだよ」

「るふん。……ツンツンした女の子がメイドカフェで密かに働き、『にやんにやん♪お帰りなさいませ、ご主人様……』って、なんであんたがここにいんのよっ!!?』となるのはもやは宿命であろうがあっ!!?」

「いや意味わかんねーから」

そんなわけで、一日不意にしまった。もうこの店に用はないので、少しゆつくりしてから解散することになった。店を出る途中、八幡は外で待っていた千尋に何があつたのか聴き出したかった。

葉山と玉砕と大人しめ

メイドカフェへ行った翌日、部室には最多の人数がいた。部長の雪ノ下、ぼつちの比企谷、アホの由比ヶ浜、いじめられっ子の早川はいつもの面子にしても、残り三人いた。可愛い戸塚、剣豪將軍兼ラノベ作家志望の材木座、そして何故かイケメンの葉山だ。

「なんで葉山がここにいの？」

八幡がそう尋ねると、葉山は爽やかに微笑んで、やあ！と手を振った。

「いやあ、俺も結衣に呼ばれてきたんだけど……」

「由比ヶ浜に？」

八幡が結衣の方を見ると、得意そうに胸を張っていた。

「や、あたし考えたんだけどさ、川崎さんが変わっちゃったのって何か原因があるわけじゃない？だから原因を取り除くっていうのはあつてと思うんだけど、ああやって人の話聞いてくれないんじゃないやそれも難しいじゃん」

「ん、まあそうだな」

「でしょ!?!だから逆転の発想が必要なわけよ。変わって悪くなっちゃったなら、もう一回変えれば今度はよくなるはずじゃん」
「で、なぜ葉山君を呼ぶ必要があつたのかしら？」

雪乃が、若干棘のある言い方で聞いた。

「嫌だなーゆきのん。女の子が変わる理由なんて一つじゃん」

「女の子が変わる理由……。経年劣化、とかかしら？」

「ああ、確かに。女の子から女に変わるってことか。平塚先生みたいに」

「違うよ！ちーちゃん納得しちやダメ！平塚先生に殺されるよ!?!?ていうか2人とも女子力低過ぎるよ！」

「またそれ……」

雪乃が呆れたようにため息をついた。その雪乃に千尋は横から聞いた。

「私って、女子力低いの?」

「私に聞かれても知らないわ。まずその女子力とやらが分からないもの」

「いやー、というか私も女子力ってイマイチ分かんないんだよね。多分、割と曖昧な意味なんだろうけど……」

「い、いいから話聞いてよ!」

女子力とは何か、について辞書引きしそうな2人に結衣が言った。で、顔を赤らめながらもじもじしつつ言った。

「女の子が変わる理由は……こ、恋、とか」

「ぶはっ!」

思わず千尋は笑ってしまった。

「ち、ちよつと!何で笑うのよちーちゃん!」

「いやだって……恋って……ぶふっ」

「と、とにかくっ!気になる人ができたら色々変わるものなのっ!だから、そのきっかけを作ればいいんじゃないかと……。で、隼人くんを呼んだわけ」

「い、いやそこで何で俺なのかよくわからないんだけど」

葉山が苦笑い混じりで結衣に言う、クワツとした表情で材木座と八幡が葉山を睨んだ。

「待った!それなら戸塚くんによってもらいたいんだけど!」

「うえっ!?」

千尋が手を挙げた。

「んー。さいちゃんもモテるとは思うけど、川崎さんのタイプとは合わないと思う」

「川崎さんに合う合わないはどうでもいいの!私は途中でテンパってしまうであろう可愛い戸塚くんを見たい!」

「は、早川さん……」

困ったように顔を赤らめる戸塚。

「川崎さんの好みに合わせないとこの作戦は無理だわ」

雪乃にそう言われて仕舞えば諦めるしかなかった。

そんなわけで、葉山が川崎に声をかけることになった。早速、作戦

開始のため、全員で駐輪場に移動。ここで川崎を待ち、葉山が声を掛けるのを全員で陰から見守る事になった。バラエティ番組みたいな。

すると、川崎が現れた。あれが川崎さんかーと思いつつながら千尋はその様子を見つめる。

「お疲れ、眠そうだね」

早速、葉山が声を掛けた。

「バイトか何か？あんまり根詰めないほうがいいよ？」

「お気遣いどーも。じゃあ、帰るから」

葉山の台詞を面倒臭そうに受け流し、自転車を押して去ろうとする。

「あのさ」

それに後ろから葉山は声をかけた。足を止める川崎。そして、素敵イケメンスマイル全開で葉山が言った。

「そんなに強がらなくても、いいんじゃないかな？」

「あ、そういうのいらんんで」

そのまま川崎は去って行った。葉山はしばらく固まったあと、照れたように微笑みながら、陰で見守っていた八幡達の元へ戻って来る。

「なんか、俺、ふられちゃったみたい」

「あ、いやご苦くつ……くくつ」

「ぷっ、ぷぷっ、グラーツハハハバババ！ふ、ふられとる！ふられとるげーあんなにかっこつけたのにふられとるげーぶふうはっはっはっ！」

「やめとけ材もくうつく……」

「ふ、2人とも！笑っちゃダメだよ！」

戸塚が2人に怒る。ちなみにその2人の陰に隠れて千尋も笑いを堪えていた。

「ま、まあ。別に気にしてないからいいよ、戸塚」

葉山が苦笑交じりに言った。だが、

「葉山某……、そんなに強がらなくてもブー！いいんじゃないかなーっはっはっはっはっ！」

「ばかつ！やめろ材木座！笑わせんな！」

「~~~~ツ!!?」

爆笑する八幡と材木座と、横で必死に笑いをこらえる千尋。それを見て結衣は顔を引きつらせた。

「こいつら最低だ……」

「これも失敗、と。仕方ないわ。今夜もう一軒のお店に行ってみましょう」

「そだね……」

そんなわけで、二軒目のお店に行くことになった。

×××

二軒目の店はホテル・ロイヤルオークラの最上階に位置するバー『エンジェル・ラダー天使の階』。朝方まで営業している「エンジェル」とつく最後の店。

八幡達はその近くの海浜幕張駅の前にPM8:30に集合することになっていた。

で、今はPM8:20。比企谷家の前で八幡と千尋は待ち合わせしていた。雪乃に「大人しめた格好」と言われたので準備に時間が掛かっているようだ。

「お待たせ！八幡」

「や、マジ待ったわ」

「ごめんごめん……」

八幡の格好は黒い立ち襟のカラーシャツにジーンズ、靴はロングブーツの革靴。髪型も前髪を上にならげていた。

「うわっ……誰?」

「俺だよ」

「小町ちゃんでしょ、それ決めたの」

「ああ、まあな」

そう言う千尋の格好も、家中から引っ張り出した服装のようで、茶色い襟付きのジャケットに黒いジーンズと、ジャケットの色以外は八幡と変わらない格好をしていた。

「…………お前こそ誰って言われそうだな」

「へ？なんで？」

「男っぽい格好だな」

「普段の私服もよく男っぽいねーって言われるんだよね。……家族に」

「最後の情報いらねえ……」

どんよりしながら2人は待ち合わせ場所の海浜幕張駅へ向かった。

で、待ち合わせ場所。2人は意外にも一番乗りだった。

「ごめん、待った？」

「今来たところだ」

戸塚が現れた。隣でラーメン屋の大将のような格好をしたやつがいたが無視。

「つて、八幡。そちらの方は？」

「へっ？」

「早川だが……」

「は、早川さん!? お、男の人かと思った……」

戸塚が割と本気で驚いたように言った。

「んーそう？」

「ふむ、性転換すら可能にしてみせるとは……さすがは千魔の魔女と
いったところか……」

材木座の言葉は無視された。

「いやー。大人しめな格好でって言われたから。私、あまり女の子っぽい服持っていないし」

「つか、材木座。お前の格好、何？何で頭にタオル巻いてんの？」

「ふう、やれやれ。大人らしい格好と言ったのは貴様達ではないか。
故に働く大人のスタイル、作務衣という奴であろう」

「八幡、置いて行けばいいよ」

「そうだな」

一つの結論が出たと同時に、コツコツと地面を鳴らす音がした。結衣がやってきた。

「結衣ー」

「んっ？ちーちゃん？……って、どこ？」

「いやここだけど……」

「えっ!?？ちーちゃん!??……ほえー、大人の男の人みたい……」

「いやノーメイクなんだけど……」

笑顔が引き攣る千尋。

「てか他の人は？」

「あとは雪乃だけだよ。一応言っとくけど、あそこの髪上げが八幡、可愛いのが戸塚くん、ラーメン屋は材木座くんね」

「へえー……って、これヒツキー!??」

「これってなんだこれって」

八幡が静かに反論した時だ。

「ごめんなさい。遅れたかしら？」

今度は雪乃が現れた。

「時間通りね」

「あ、ああ……」

来るなり雪乃は全員の服装を見回した。

「ふむ……」

そして、材木座から戸塚、結衣、千尋、八幡と指を差した。

「不合格」

「ぬう？」

「不合格」

「……え？」

「不合格」

「へ？」

「不性別」

「いやっ……」

「不資格」

「おい……」

何故か合否判定がされていた。しかも若干2名評価が違った。

「あなた達、ちゃんと大人しめな格好でって言ったでしょう」

「待って、不性別って何」

「これから行くところはそれなりの服装をしていないと入れないわよ。男性は襟付き、ジャケット着用が常識」

「そ、そういうものなの……?」

戸塚が恐る恐る聞いた。

「そこそこいいお値段のホテルやレストランはそういうお店が多いの。覚えておいたほうがいいわ」

「あ、あたしもダメ?」

結衣が確認すると、雪乃は困ったような顔になる。

「女性の場合、そこまで小うるさくはないけど……。早川さんを男性役にすれば……」

「おーい雪乃?私、女の子だよー?」

「念の為、私の家で着替えたほうがいいわ」

「え、ゆきのんの家行けるの!?!?行く行く!」

「じゃあ行きましょうか」

「待って、私本当に男役させられるの?」

しつこく聞くと、雪乃はジロリと千尋を見た。

「そんな格好しているものだから、男役をやりたいものなのだと思いますのだけれど」

「私の家、あまり女の子用の服無いんだよ。大人しめた格好って言われたからこうするしかなくて……」

「……でも、流石に比企谷くん一人に女性が三人付くのはアレなのだけれど」

「どうやら雪乃の頭の中では自分と八幡と結衣が行くことは確定しているようだ。」

「つまり、私は男役か行かないかって事になるの?」

「そうなるわね」

「……分かった。男役でいいよ」

「分かったわ。では由比ヶ浜さん、行きましょう」

「うん」

で、最後に雪乃は戸塚を見た。

「戸塚くん、せっかく来てもらって申し訳ないけれど……」

「ううん、全然いいよ。みんなの私服見られて少し楽しかったし」
「じゃあ、由比ヶ浜が着替えてる間、俺たちは飯食ってるからさ。終わったら適当に連絡くれ」

「うん、そうするー」

雪乃と結衣と別れ、男三人と千尋は腹の減り具合を確認するように黙った。

「して、何を食す？」

材木座に聞かれ、戸塚と八幡と千尋は顔を見合わせる。

「ラーメンだよね」

「ラーメンだよな」

「ラーメンだね」

早川と川崎とフオロー

飯も食べ終わり、ホテルの前で集合。

「周りから見たら私達どう見えるかな……」

「知り合いからですら男に見られるくらいだからな。男友達に見えるんじゃないか？」

「そういえば、八幡は私のこと初見で私だつてわかつたよね。なんで？」

「いやそりや自宅から出てきたからな」

「ふーん……」

「逆にお前は俺だつて分からなかつたよな。いや別になれてるんだけどさ」

「いやアレは冗談だよ。てか本当に分かつてなかつたら、家の前でずっと待ちぼうけしてたし」

「それもそうだな」

「……ねえ、私一応しやべんないほうがいいかな？」

「あー……まあ、男役ってんならそうかもな。その辺は雪ノ下が指示するんじゃないの？」

「それもそつか。ていうか、さっきのラーメン美味しかったね。調子に乗って替え玉しちゃったよ」

「そりやよかつた。俺の千葉ラーメン名所の一つだからな」

「なら、今度は私の千葉ラーメン名所を……」

「駅の裏のコンビニの横なら知ってるぞ」

「ええっ!??なんで分かつたの!」

「そりや、一番目につきそうな所にあるからな。ていうか、転校してきたばつつかで俺に千葉ラーメンについて挑むのは10年早い」

「ぐう……埼玉ラーメン屋なら負けないもん!」

「俺は千葉から出るつもりはないがな」

なんてほのかに盛り上がっていると、ヴーツと八幡の携帯が震えた。

『今着いたけど、もういるー?!』

結衣からのメールだ。今着いた、との事なので周囲を見回してみる。

「お、お待たせ……」

結衣と雪乃がドレスを着て立っていた。

「おぉー！2人ともめつちや美人！……私も着てみたかった……」

テンションが上がった直後に下がった。

「てかすっごいよ、ゆきのんの家。こういうドレス何着もあったし。マジゆきのん何者!?!?」

「別に。こういうのはたまに着る機会があるから持っているだけよ」

「普通はそういう機会がないんだけどな」

なんて他愛のない話をしながら4人はエレベーターに入った。

ガラス張りのエレベーターで、上に行くたびに東京湾が見渡せるようになった。で、最上階に到着。

「おい……、おい、マジか。これ……」

八幡がバーの雰囲気には圧迫される。やっぱり帰らない?みたいな感じのアイコンタクトを送ると、結衣も千尋もぶんぶんと頷く。だが、雪乃はそれを許さない。

「キョロキョロしないで」

ヒールで八幡の足を踏ん付けた。

「いつ!」

「早川さんも聞いて。背筋を伸ばして胸を張りなさい。顎は引く。由比ヶ浜さん、早川さんの左肘を私と同じようにして」

言われるがまま、結衣も千尋も従った。

「では行きましょう」

雪乃の合図で中へ進んだ。ギャルソンの男性が頭を下げ、端の方にあるバーカウンターへと導く。そのカウンターの奥には、見覚えのある女性がグラスを拭いていた。

4人は席に着いた。

「川崎」

八幡が声をかけると、川崎はちよつと困った顔をした。

「申し訳(ご)いません。どちらさまでしたでしょうか?」

「同じクラスなのに顔も覚えられてないとはさすが比企谷くんね」

「や、ほら。今日は服装も違おうし、しょうがないんじゃないの」

雪乃の一言に結衣がフォローする。

「雪ノ下……」

「こんばんは」

「ど、どもー……」

「由比ヶ浜か。一瞬わからなかったよ。じゃあ、彼らも総武高の人？」

「あ、うん。同じクラスのヒツキー……比企谷八幡と、C組の早川千尋」

「初めまして。よろしくね川崎さん」

まったく臆することなく千尋は微笑みながら挨拶した。それを見て、川崎はふつと微笑んだ。

「そっか、ばれちゃったか」

特に変な言い訳する事もなく、川崎は言った。

「何か飲む？」

「私はペリエを」

雪乃のその解答を聞いて、結衣が言った。

「あ、あたしも同じのをっけ？」

「あ……」

先を越され、八幡の口からは何も出ない。

「私はシンデレラー！」

どこかで聞いたことあったのか、得意げに答えた。

「早川さん、お金足りるの？」

「えっ？1000円以内じゃ買えない？」

「川崎さん、早川さんには辛口のジンジャエールを」

雪乃が呆れたように代答した。すると、今度は八幡が得意げに答えようとした。

「俺はMAXコー」

「彼にも辛口のジンジャエールを」

八幡にも辛口ジンジャエールの制裁が下った。すると、「かしこまりました」と川崎は言うのと、シャンパングラスを4つ用意して、慣れ

た手つきで注ぎ、コースターの上に置いた。

「それで、何しに来たのさ？まさかそんなのとデートってわけじゃないんでしょ？」

川崎が雪乃に聞いた。

「まさかね。横のこれを見て言ってるのなら、冗談にしたって趣味が悪いわ」

「あの……お前ら二人の口論なのに無闇に俺を傷つけるのやめてくれない？」

一先ずそれを注意してから、八幡が言った。

「お前、最近家帰んの遅いんだってな。弟、心配してたぞ」

「そんなこと言いにはわざわざ来たの？ごくろー様。あのさ、見ず知らずのあんたにそんなこと言われたくらいでやめると思ってるの？」

「クラスメイトに見ず知らず扱いされてるヒツキーすごいなあ……」
妙なところで感心する結衣。

「最近、やけに周りが小うるさいと思ってたらあんたたちのせいか。大志が何か言ってきた？どういう繋がりか知らないけど、あたしが大志に言っとくから気にしないでいいよ。だから、もう大志に関わらないでね」

関係ない奴は引つ込め、みたいな意味合いで言ってきた。

「止める理由ならあるわ」

雪乃が口を挟んだ。

「10時40分、シンデレラならあと1時間ちよつと猶予があったけれど、あなたの魔法はここで解けたみたいね」

「魔法が解けたなら、あとはハッピーエンドが待つてるだけなんじゃないの？」

「それはどうかしら、人魚姫さん。あなたに待ち構えているのはバッドエンドだけだと思うけれど」

バーの雰囲気は掛け合わせたような2人の会話には他の人の介入を許さない。八幡も千尋も黙ってその様子を聞いてると、結衣が千尋に聞いた。

「ねえ、あの2人何言ってるの？」

「18歳未満は労働基準法で10時以降働くのは禁止されている。つまり、川崎さんはここで年齢詐称をしていることになるじゃん？そういうこと」

千尋が説明した。すると、雪乃が聞いた。

「辞める気はないの？」

「ん？ないよ。まあここはやめるにしてもまた他のところで働けばいいし」

川崎のその態度に雪乃は少しイラついたのか、ペリーを軽く煽る。

「あ、あのさ……川崎さん、なんでここでバイトしてんの？あ、やー、あたしもほら、お金ない時にバイトするけど、歳ごまかしてまで働かないし……」

「別に……。お金が必要なだけだけど」

「あー、や、それは分かるんだけどよ」

「わかるはずないじゃん。あんなふざけた進路を書くような奴にはわからないよ」

八幡の台詞も途中で遮る。一度、屋上で進路希望調査書を八幡は川崎に見られている。

「別にふざけてねえよ……」

「そ、ふざけてないならガキつてことでしょ。人生舐めすぎ。あんたも、……いや、あんただけじゃないか、雪ノ下も由比ヶ浜にも……早川？にもわからないよ。別に遊ぶ金欲しさに働いてるわけじゃない。そこのバカと一緒にしないで」

と、邪魔をするなど言うように川崎は言った。

「やー、でもさ、話してみないとわからないことってあるじゃない？もしかしたら、何か力になれることもあるかもしれないし……。話すだけで、楽になれること、も……」

「言ったところであんた達には絶対わかんないよ。力になる？楽になるかも？そう、それじゃ、あんたあたしのためにお金用意できるんだ。うちの親が用意できないものをあんた達が肩代わりしてくれるんだ？」

「そ、それは……」

結衣も黙らしながら、自分の意見をマシンガンのように言い募る。雪乃がそれに対して口を開きかけた時だ。意外にも口を挟んだのは千尋だった。

「ガキなのは一体どつちなのかな?」

「……………あ?」

イラついたように川崎がギロリと千尋を睨んだ。だが、千尋はまったく恐れることなく言った。

「さつきから威圧的な言葉を並べて威嚇してるみたいだけど、誰かに相談する前から関係ないだの無理だの決め付けて、ルール違反を平気で犯す方がガキなんじゃないの?」

その言い草に、八幡も雪乃も結衣も目を丸くして千尋を見る。

「……………あんた、何様のつもりで言ってるの?」

「こつちの台詞だよ。ずいぶんと上から目線で物を言ってたけど、勝手に拗ねる前に、まずはルールを破らないで何とかする方法を探したら?そもそも、夜間のバイトだってバレたら親にだって迷惑掛かるんだし……………というか、もう弟さんに心配掛けてるんだし……………」

「早川さん」

「何?……………あ?」

気が付けば川崎は黙り込んでいた。やっべ、と千尋は思った。確かに言いすぎた。

「や、やーほら、えつと……………さつき聞いた感じだとお金がないんだよね?例えばだけど、大学受験とかお金掛かるじゃん?国公立にすればさほど掛からないし、予備校に通うにしても、この前その八幡に教えてもらったんだけど、スカラシップとかいうの取れば学費免除してくれるらしいし、色々とそういうお金掛けない方法とか探してみれば良いんじゃないかな?」

なんとかフオローするように言ってみるが、川崎から返事はない。と、思ったら川崎の口から声が出た。

「……………ま、考えてみる」

それを聞くと、千尋は安心したように息をついた。

「では、行きましょー」

雪乃が言うのと結衣と八幡と千尋が立ち上がった。お金を払い、雪乃、結衣、八幡、千尋と立ち去った。

で、店を出て今はエレベーターの中。

「…………ふう、偉そうな事言っちゃったなあ…………」

「まあ、アレで良かったんじゃないかねえの。あの様子なら、川崎も大志に心配かけるような事しないかもしれないしな」

「でも、ちーちゃんがあんな風に言うと思わなかったなあ。意外」

「本当ね。あのまま私が止めなかったらどうなってたか…………」

「うつ、ごめんね…………」

「いえ、気にしないでくれていいわ。私では、ああやって丸く収めることは出来なかったと思うから」

「うーん…………確かに雪乃ってフォローするの下手そうだよね」

「…………そんなことないと思うのだけれど」

「いや、お前はフォロー下手くそとかの前にはないだろ」

「あなたに言われたくないわ」

「バツカおまえ俺なんて常日頃フォローしまくってるから。だから誰とも話さずに1人でいるんだろ」

「…………それは、誰に対するフォローなのかしら？」

「あ、あははっ…………」

そんな会話をしながら、4人は帰宅した。

平塚先生とバトルロイヤルと人員補充

「じゃ、また今度ね八幡」

「おー」

家の前で2人は別れ、八幡は家に入った。

「たでーまー」

「おかえりー、お兄ちゃん」

誰も起きてないだろうと思いつつ挨拶すると、意外にも返事があつた。

「なんだ、起きてたのか小町」

「うん。こう見えて受験生だからねー」

テキストに挨拶しながら家の中へ入り、着替えてソファーに腰を掛けた。

「ふう……」

「お疲れだねー。依頼はどうなったの？」

「まあ、なんとかあったんじゃねえの？あとは川崎次第だ」

「ふーん、でも驚いたなー」

「あ？何が」

「お兄ちゃん、まさかお菓子の人と同じ部活に入ってたなんてなー」

「は？お菓子の人？」

一瞬、何のことだか分からなかったが、すぐに分かった。事故にあつた時にお菓子を持ってきた人だ。ちなみに八幡は食べてない。小町が全部食べた。

「うん。結衣さん」

「……………」

意外な事実を知ってしまった。

×××

職場見学という名の材木座との出版社デートという新し過ぎる日

から数日経った。川崎の件は上手くいったようで、無事に川崎はバイトを辞めた。ちなみに中間試験は千尋はまずまずだった。理科は9点で数学が4点。他の科目は普通。

で、今は奉仕部。

「……よーつす」

「こんにちは。早川さん」

中には雪乃の姿しかなかった。

「元気がないようだけれど、どうかしたの？」

「これ……」

言いながら千尋はパスツと紙束を机の上に置いた。雪乃はそれに視線を落とした直後、キュツと目が細くなる。材木座義輝先生の渾身の次回作設定資料である。だが、次回作も何も一作目が存在しない。「大変だったのね」

資料を見るだけで全てが説明する間もなく通じてしまった。

「そういえば、由比ヶ浜さんは？」

「今日も休むって。最近どうしたんだろうね結衣」

「……そう」

雪乃は残念そうに視線を自分の読んでいる本に落とした。最近、結衣は奉仕部にきていない。昼休みにお昼を食べている時に、千尋に伝える形で欠席していた。

「もしかして、川崎さんの件でドン引きされたのかなあ……」

「そんな事ないと思うわ。あの日の帰り道、途中まで由比ヶ浜さんと一緒だったのだけれど、あなたのお説教を気にした様子はなかったもの」

「お説教なんてそんな大したモンじゃないよお！」

「……変なところで照れないでもらえるかしら」

呆れた様子で千尋を見る。

「一応、聞くけど雪乃は特に何もなかったよね？」

「ええ。この前の休みを挟んで急に昼休みに部室にも来なくなったから、私が原因ということはないと思うけれど」

「と、なると……原因は」

言いながら部室のドアを見ると、ちようど八幡が部室のドアを開いたところだった。

「うす」

短い挨拶とともに部室の中に入り、机の上に鞆を置いた。

「ちようど八幡の話してたんだよ」

「俺が他人の話題に？悪口しか思い浮かばないんだが」

「いや違って。結衣となんかあったん？」

「いや、何も」

まさかの即答だった。それに益々怪しさを覚える千尋。

「何もなかったら、由比ヶ浜さんは来なくなったりしないと思うけれど。喧嘩でもしたの？」

雪乃も八幡に問い詰める。

「いや、してない、と思うが」

返事がハッキリしなくなった。

「喧嘩の自覚って本人にはないものだよねー。『いや、アレは喧嘩じゃないはず』って他人から見たらほとんど喧嘩だつつのに」

「いや、本当に喧嘩してるわけじゃないんだけど」

千尋に言われるも、八幡は何も話そうとしなかった。

「……静いとか？」

雪乃が聞くが、八幡は首を横に振った。

「ああ、それは近いけど、ちよつと、違うと思う。当たらずとも遠からずって感じか」

「じゃあ戦争？」

「当たってないし遠くなったな」

「なら、殲滅戦」

「話聞いてた？遠くなったよ？」

「テロとか？」

「一方的じゃねえか」

最後のは千尋だ。

「では、すれ違い、というやつなのかしらね」

「ああ、そんな感じだな」

「……そう、なら仕方ないわね」

雪乃はため息をつくとき、本を閉じた。

「まあ、こういうのはあれだろ、一期一会ってやつだな。出会いがあれば別れもある」

「素敵な言葉のはずなのにあなたが使うと後ろ向きな意味でしか捉えられないわね……」

「私の場合は出会おうとしても離れられちゃってたなー。繋がりがそもそも出来なかった」

「ああ、俺もだよ」

千尋の言葉に八幡は思わず苦笑した。すると、唐突にガラツとドアが開く音がした。一瞬、結衣かと思ったが、違った。

「先生、ノックを……」

「よーっす、平塚せんせ」

「ふむ。由比ヶ浜が部室に来なくなってからもう一週間か……。今の君たちなら自らの力でどうにかすると思っていたのだが……。まさかここまで重症だったとは。流石だな」

どこか感心するように言った。

「あの、先生……。なんか用があつたんじゃ」

「ああ、それだ。比企谷。以前、君には言ったな。例の勝負の件だ。今日は新たなルールの発表に来た」

言いながら仁王立になる平塚先生。それを聞いて、雪乃も八幡も千尋も聞く姿勢になった。

「君たちには殺し合いをしてもらいます」

「………寝惚けてるの?」

千尋が真顔で聞くと、若干赤面しながらも咳払いしね答えた。

「ん。んんっ。と、とにかく！簡単に言うたバトルロワイアルルールを適用するということだ。四つ巴のバトルロワイアルだから、もちろん共闘もありだ。君達は対立するだけではなく、協力することも学んだ方がいい」

熱弁する平塚先生。すると、雪乃が言った。

「ということは、常に比企谷くんは不利な状況で争うことになります

けど……」

「だよな」

「安心したまえ。今後は新入部員の勧誘も積極的に行っていく。ああ、もちろん勧誘するのは君たちだが。つまり、自分の手で仲間を増やすことができるのだよ。目指せ、一五一匹！」

自信満々にいう平塚先生。年齢がドンドンとバレていった。

「どちらにしろ比企谷くんには不利なルールね。勧誘に不向きだし」

「お前に言われたくねえぞ……」

「確かに八幡に誘われたら宗教と勘違いされるかもねー」

「言葉に気を付けろよ早川。というかお前の場合ほわざとだよな？」

しかし、かく言う千尋も勧誘する相手がいない。

「とはいえ、その由比ヶ浜ももう来ないようだしな……。いい機会だ。欠員を補充する意味でも新入部員の獲得に乗り出した方がいいだろう」

「待ってください。由比ヶ浜さんは別に辞めた訳では」

「来ないのなら同じだよ。幽霊部員など私は必要としていない」

雪乃の一言に平塚先生は鋭い視線と共に一蹴した。

「まあ、確かにねー。というか部活自体が別に義務的にやるものじゃないし」

意外にも千尋がシレッツと言った。

「その通りだ。ここは仲良しクラブではない。青春ごっこならよそでやりたまえ。私が君達奉仕部に課したものは自己改革だ。ぬるま湯に浸かって自分を騙すことではない」

きゅつと唇を噛み締める雪乃。

「しかし、由比ヶ浜とこの早川のおかげで、部員が増えると活動が活発化することはわかった。だから、君たちは月曜日までにもう一人、やる気と意志を持ったものを確保して人員補充したまえ」

月曜日まで、というのは今日と当日を含めても4日しかない。そんな事が出来るか、と八幡も千尋も思っていると、雪乃が声をかけた。

「平塚先生、一つ確認しますが、人員補充をすればいいんですよね？」

「その通りだよ、雪ノ下」

短くそう頷くと平塚先生は去って行った。

「で、どーする雪乃？」

「さあ？誰かを誘ったことなんて一度もないからわからないけれど。でも、入ってくれそうな人に心当たりならあるわ」

「誰？戸塚？戸塚か。戸塚だよな？」

「いいね。戸塚くん。戸塚くんにしよう」

「違うわ。彼も入ってくれるかもしれないけれど……。もっと簡単な方法があるでしょう？」

「簡単……？土下座とか？」

「それは簡単にすべきことではないと思うのだけれど……」

千尋の台詞に雪乃は呆れたように言った。

「わからない？由比ヶ浜さんのことよ」

「は？だって、やめるんでぞ？」

「うちの3姉妹？」

「だったらなに？もう一度入り直せばいいだけでしょ」

「まあ、そうかもしれんけれど……」

「とにかく、由比ヶ浜さんが戻ってきてくれる方法を考えておくわ」

気が付けば、雪乃はえらいやる気を出していた。

「えらいやる気だな」

八幡が言うと、雪乃は自嘲気味に微笑んだ。

「ええ。つい最近気付いたのだけれど、私はこの二ヶ月間をそれなりに気に入ってるのよ」

「雪乃がデレた！デレノ下さんだ！」

「……黙りなさい早川さん」

茶化されて恥ずかしくなったのか、若干顔を赤らめた。そして、早速行動に移すように「それじゃ」と挨拶して鞆を持って部室を出て行った。

「……じゃ、私達も帰ろっか？」

「そーだな」

2人も荷物を纏めて部室を出た。

八幡と戸塚と千尋とどっか遊びに

帰り道。結衣に奉仕部に戻ってきてもらおうことになった。

「で、どうしよつか?」

「俺が聞きてえよ」

八幡と千尋はいつも通り一緒に帰っていた。

「どう?この後、どっかで作戦会議とか」

「作戦って、戦うのかよ」

「いいじゃん。デートしようぜ☆」

「そういうこと言われるとホント勘違いしそうになるからやめろ」

「勘違い、ねえ……」

少し意味深に千尋は呟いた。そういう所でこいつ結衣とすれ違い起こしたんだろうなあ、みたいだな。

「……なんだよその目」

「べつにー?ほら、それより早くどっか行こうよ」

「どっかってどこだよ」

「サイゼとか?」

「分かった」

さっそく自転車にまたがって出発しようとした時だ。

「八幡?あ、やっぱり八幡だ」

キラキラと輝く笑顔で戸塚が声を掛けてきた。

「戸塚くん?」

「あ、早川さん」

「ね、戸塚くん。私の事も『ちーちゃん』って呼んでくれない?」

「えっ?な、なんで?」

「いいから!」

強いられたので、戸塚は若干顔を赤らめながら言った。

「ち、ちーちゃん?」

「グハアツ!」

「ち、ちーちゃん!?!?」

後ろにぶつ倒れた千尋に心配そうに駆け寄る戸塚。その戸塚に八幡が言った。

「ほっとけ。それより戸塚、部活帰りか？」

「まだ終わってないんだけど、夜はテニススクールがあるから……ちよつと先に抜けたんだ」

「スクール？」

「未元物質？」

千尋の台詞には誰もツッコまなかった。

「うーんとね、テニススクール。部活だと基礎的な練習がメインになっちゃうから」

「へえ……結構本格的にやってるんだな」

「そ、そんな大したことないよ……でも、好きだから」

「え？悪い、もう一回言ってくれ」

「えつと……そんな大したことないよ？」

「じゃなくて、その次」

「……す、好きだから」

「オツケ、今度こそ聞き取れた」

八幡が心のXボタンを押して、今の言葉を心に深く刻み込んでると、耳元で音がした。

『……す、好きだから』

千尋が録音機を再生していた。

「……………いくら？」

「後で」

「何してるの？」

「なんでもない」

口を揃えて否定すると、「あつ」と戸塚が思い出したように言った。

「そういえば、ちーちゃんってさ、」

「ち、ちーちゃん呼び!?？」

「えっ?ダメだった？」

「ううん!?全然!むしろこれからそれで!」

「う、うん……。それで、ちーちゃんってさ。テニス上手いよね」

「え？そ、そう？」

「ああ、そうだな。前のテニス勝負の時にお前一人で頑張ってたしな」
八幡にも褒められ、少し嬉しそうに千尋は微笑んだ。

「中学でテニスとかやってたの？」

「ううん。一人で練習してたんだ。……一人で」

最後の方は聞こえないように言った。事情を知ってる八幡は同情
気味に顔を伏せた。

「へー、どんな練習してたの？」

「どんな……」

「戸塚、やめてやれ」

八幡が途中で止めた。

「つて、これから戸塚くんはテニスか。ごめんね引き止めて」

「ああ、そうだったな。じゃあな」

と、挨拶して2人は別れようとした。だが、その2人に戸塚は声を
掛ける。

「あ、あの……スクール、夜からなんだ。だから、始まるまでちよつと
時間があつて……、駅の近くなんだけど……歩いてすぐのところだ
……じゃなくて、少し、遊びに行かない？」

「え……」

「暇ならでいいんだけど……」

「行く」

千尋が即答した。

「おい、お前作戦会議は？」

「可愛い正義だよ。八幡」

「いや全然意味分かんないんだが……」

八幡はそう呟いたものの、千尋は戸塚とさっさと出掛けてしまっ
た。

戸塚と八幡と千尋と材木座とプリクラ

そんなわけで、ゲーセン『ムー大』に到着。千尋は自分以外の人間とゲーセンに行くなんて初めての経験なので、若干ワクワクしていた。

「わあ、すごいね……」

戸塚がキラキラしている店内を見回して言った。

「八幡はいつも何やってるの?」

「俺は……クイズか上海だ」

「ちーちゃんは?」

「ちーちゃん……ふへへ……はっ、わ、私は格電撃クライマックスなったらとマリカーとクレイニングゲームとマキブ……はたまにしかやらないなあ。最近はガチ勢多いし」

「ふうん……じゃあ、マリカーでもやるっか?」

「ああ、いいんじゃないか」

そんなわけで、三人でマリカーコーナーへ向かった。マリカーは格ゲーコーナーを一度突破しなければならぬ。いかにも格ゲーの強そうな連中がほぼ無表情で手元を高速で動かしながら、キャラを動かしている中で、一際大きな体を持った男が見えた。

真夏近いのにコートに指抜きグローブ、言わずもがなの剣豪将軍様だ。

「あの、八幡……あれって材も」

「別人だ」

戸塚の台詞を遮る八幡。

「そうかなあ……材」

「ヘックチ!」

「ど、どうしたの、ちーちゃん?風邪?」

「ううん、平気だよ」

頭の中で、「加藤茶のくしやみの練習をしておいてよかった……」と心底思いながらなんとか取り繕った。

「それよりちーちゃん。あれって材木座くんだと思わない？」

「……………」

無理だった。すると案の定、材木座は大きさに辺りを見回す。

「ふむん、我を呼ぶ声がする……。なななんとっ！八幡ではないか！」

それを聞いて、八幡も千尋も額に手を当てた。

「ほら、材木座くんでしょ？」

得意げに胸を貼る戸塚に、2人も「そうじゃないんだよ…」と心の中でツツコんだ。

「まさかこんなところで会うとはな。サウザンド・ウィツヘポモツ!!？」

直後、千尋が掌底を突き上げるような勢いで材木座の口を塞いだ。

「…………戸塚の前でその名を呼ぶな」

「…………ふお、ふおへんふあふあい」

謝られたので手を離す。離すと、材木座はそそくさと八幡の後ろに回り込んだ。

「は、八幡…………やはり女は怖いな」

「お前今素だろ」

「して八幡よ。何か用でもあったのか？」

「や、適当に遊びに来ただけだ」

「なぬ!? 待て。それは戸塚氏も一緒にか」

くわっと目を見開いて、戸塚を見る。すると戸塚はビクツとして千尋の後ろに回り込み、千尋は千尋で戸塚の前に出て指をコキコキと鳴らした。

「う、うん…………」

「ほほう、しばし待て」

ニヤリと背筋も凍る笑みを浮かべると、さつきまで一緒にいたメンバー達の元へ向かい、何か話をする。そして、すぐに戻ってきた。

「さて、では参ろうか」

「いや、まったく誘ってないんだが…………」

気が付けば一緒に行動することになっていた。

「なあ、材木座、さっきのあれ、友達か？」

「否、あるかな勢だ」

「いや、あの人の通り名とか聞いてねえから……」

「もふ？通り名ではないぞ。きやつの通り名はアツシユ・THE・ハウ
ンドドツグだ」

「だせえ……」

『鉄剣』で相手をフルボッコにした挙げ句、キレられて台パン・台キック・灰皿ソニツクを喰らったのだが、その灰皿を見事にキャッチして余計に反感を買い、ボコボコにされたところから来ている。ムー大では古参だ。本名は知らん。みんなアツシユさんと呼ぶからな」

「あ、そう……」

八幡はどうでも良さそうな顔をしながらふと、千尋を見た。明らかに真顔だ。どうやら、完全に材木座シカト態勢に入ったようだ。

「じゃあ、あるかな勢って何？」

戸塚が聞いた。その話まだ続けるの？と千尋は思ったが、それに構わず材木座は説明を続けた。

「まあ、同じゲームをやっている連中ということだな。タイトルにも使うし、地域にも使う。用例としては『あるかな勢の中でもとりわけ千葉勢はゴミ』といった感じだ」

「ふーん、で、友達なのか？」

「否、あるかな勢だ」

「だからそれ友達ってことじゃねえのかよ……」

「キャッチボールの出来ない人だな……」

千尋が小声で毒付いた。

「む、どうだろうな。会えば話もするし、メッセでもやりとりはある。一緒に県外遠征に行ったりもするが……。だが本名も知らぬし、何をやっている人かも知らんぞ。ゲームやアニメの話しかせんからな。格ゲー仲間というのがしっくりくるな」

「格ゲー仲間か……。わかりやすくいいな。そういうの」

「であろう。つまり、我と八幡も体育ペア勢ということになる」

「え、そうなの？」

「じゃあ、僕も八幡と体育でペア組んだから体育ペア勢だね」

「え、そ、そうなの……？」

シヨックの受け方と意味が全然違った。

「ちーちゃんは……」

続けて笑顔で戸塚は千尋の方を見たが、そこから先の言葉が出ない。体育は男女別だし、別のクラスだし、一緒になることはなかった。

「……ごめん」

謝ってしまう戸塚だった。だが、意外にも千尋は笑顔で答えた。

「大丈夫だよ。代わりに戸塚くんがお嫁に来ればいいから」

「ええっ!?!?僕がお嫁に行くの!?!?」

「早川、戸塚はお前にはやらん」

「八幡、そういう問題なの!?!?」

珍しく戸塚がツツコんでいた。すると、千尋が思い出したように言った。

「そういえば、最近材木座くんはラノベ持ってきてないけど、どうしたのあれ?」

千尋はまったく成長していないものの、頭の中で勝手に編集者をやるのが楽しかった。

「ああ。あれ、やめた」

「……………はっ?」

あっさりと言われ、千尋だけではなく八幡まで声を出した。

「なんでまた急に……」

「むう、やはりラノベ作家は自由業だからな。保障もなにもないし何年も続けられるとも限らぬ。何より、書かねば金が入ってこないのは大変であろう。その点、ゲーム会社なら会社にいるだけで給料が入ってくるからな!」

「お前、気持ちのいいくらいクズだな」

「かつ!八幡には言われたくないがな」

「どっちもクズだよ」

千尋が割と本気で呆れたように言った。

「それより八幡、お主ここへ遊びに来たのだろう。ここは私のホーム

故、案内してやろう。何かやりたいものはあるか？」

「あ、僕、プリクラ撮ってみたい」

隣で戸塚がプリクラコーナーを指して言った。

「八幡、プリクラ撮らない？」

「なんでだよ……。だいたい、これ女子・カップルゾーンって書いてあるじゃん」

「大丈夫だよ。ちーちゃんもいるし」

戸塚が隣の早川を見て言った。

「まあ、確かに、な」

「じゃ、決まりだね」

にっこりと微笑みながらプリクラの方へ向かった。で、4人は機械の中へ。

「うはあー。私、友達とプリクラとか憧れてたけど初めてだなー」

「えっそうなん？」

「え、そうじゃないと思ったの？」

「……………悪い」

なんて悲しいトークをしてる間に、戸塚がプリクラを操作した。

「うん、これでいいみたい」

「お、お？なに、始まんのか？これどうすりやいうおっ！まぶしっ！」

いきなりフラッシュが焚かれた。

「うわあ！目が、目があゝ!!？」

一人でムスカゴっこをやる千尋をほっという機械は『もういつかいいくよ』とゆらゆらした声で写真を撮り始める。そのままバルスを数回放った後、ようやく終わって落書きも終えた。

「肌、白いね……………」

「補正スゲエなこれ……………」

「うむ。というか、キラキラしてる八幡がおぞましいな……………これだけキラキラしてるのに目だけが濁っているとは……………」

「むしろ周りがキラキラしてるから目が目立つんじゃない？」

ひどい言いようだった。で、気がつけば時間は大分経っていた。

「あ、もうこんな時間だ。そろそろ……………」

「ああ、スクールか」

「頑張つてね。未元物質や心理定規さんと仲良くね」

「じゃあ、ぼくそろそろ行くね」

そのまま戸塚は走り去った。その背中を見ながら千尋は呟いた。

「……嫁にほしい」

「お前は行く方だし、お前にはやらん」

「ふむん、八幡のものでもないがな」

ダメ三人組が呟いた。

比企谷兄妹と千尋と東京わんにゃんショー

翌日、千尋は自分の部屋の窓を全開にして、ゴロゴロしながら漫画を読んでいた。すると、その窓からピヨーンと何かが入って来た。「むっ?」

漫画を自分の前から退かして見ると、猫がゴロゴロいいながら千尋のお腹の上にモツサリと乗り、寝転がった。

「……………えっ、何?」

やだ可愛い……。とか思いながら猫の喉をちよこちよここと撫でる。すると、窓の外から「すいませーん」と聞き慣れた声が出た。直後、お腹の上から猫は退いた。

はいはい何事?と思いつつ窓の外を見ると、小町がいた。

「あ、小町ちゃん」

「あ、千尋さん!うちの猫そつちに行きませんでしたか?」

「あ、この子小町ちゃん家の猫だったんだ」

言いながら千尋は猫を抱き上げた。

「はい。カーくんおいでー」

呼ぶと、カマクラは千尋の胸を蹴って小町の家へ飛び込んだ。

「見た目より身軽だねー」

「そうなんですよねー。家じゃゴロゴロしてて丸まっているのに」

「名前はカーくんでもいいの?」

「本名はカマクラですよ」

「あーそれでカーくん」

なんて猫トークをしていると、「あ、そだ」と小町は声を上げた。

「そういえば、今日兄と東京わんにゃんショーに行くんですけど、良かったら一緒にいきませんか?」

「え?いいの?」

「はい。人数多い方が楽しいですし」

「うーん、でもお邪魔じゃない?」

「いいいえ。小町も学校での兄のこと知りたいですし」

そこまで言われては行かないわけにもいかなかった。

「分かった。じゃあ家の前で待つてるね」

「はい」

そんなわけで、千尋は準備を始めた。

×××

小町と八幡が家を出て、千尋と合流してようやく出発。バスに乗ってしばらく進むと、幕張メッセに到着。

「来るって言つといてアレだけどき、東京わんにゃんショーって何?」

「知らずに来たのかよ……」

千尋の疑問に八幡は思わず呆れてしまった。

「まあアレですよザツクリ説明すると、動物ふれあいコーナーです」

「ふーん……どんな動物がいるの?」

「色々ですよ。さあ、行きましょう」

ザツクリ過ぎる説明を受けて三人は中へ。直後、小町がはしやぎながら指差した。

「わー、お兄ちゃん!ペンギン!ペンギンがたくさん歩いてるよ!可愛いー!」

「ああ、そういやペンギンの語源ってラテン語で肥満って意味らしいぞ。そう考えるとあれだな、メタボサラリーマンが営業で外回りしてるみたいだな」

「わ、わー。急に可愛く思えなくなってきた……」

あからさまにテンションが下がる小町。腕を下ろし、げんなりとした表情で八幡を睨んだ。

「お兄ちゃんの無駄な知識のおかげでこれからペンギン見るたびに肥満の二文字が浮かぶようになったよ……。ねえ?千尋さん?」

「え?あー別に私は良いと思うけどな。そういう知識、というか雑学?って面白いじゃん?」

「千尋さん、超ポジティブですね……。はっ、これは兄とセットでプラマイ0なのでは?」

「バツカお前俺超ポジティブだろうが。専業主夫志望とかポジティブシンキングだろ」

「プラマイ以前の問題でしょ……」

「うっせ、お嫁さんに言われたくねえんだよ」

「えっ、お嫁さんって、誰が?」

「ああ、小町は知らないのか。早川は職場見学希望調査書にお嫁さんだから平塚先生の家に行きたいって言ったんだよ」

「……………うわあ」

「そんな目で見ないで小町ちゃん!」

「千尋さんを見る目が180度変わったわ」

「小町ちゃん!」

「叫ぶな。行くぞ」

と、いうわけでペンギンコーナーから離れて、今度は鳥ゾーンに向かった。が、そこで見覚えのある影が見えた。

「あれ、雪乃?」

「……………ぽいね」

雪乃が歩き回っていた。何度かパンフレットに視線を落としては、周囲を見回し、またパンフレットを見る。明らかに迷っていた。

樹海とか密林とか森丘の上位やG級のクエストを受けているハンターってまさにあんな感じなのかなあと思いながらも千尋は雪乃の方へ向かって行った。

「雪乃ー」

「あら、早川さん?」

「迷ったの?」

思わずニヤニヤしながら意地悪そうに聞いてしまった。すると雪乃はふいっと顔を背ける。

「まあ、その通りなのだけれど」

「ふうーん? あっちに八幡と小町ちゃ……………八幡の妹いるから一緒に回ろうよ」

「そ、そう?」

「うん。あの2人ならOKしてくれるだろうし」

「そう、ね……。そうさせてもらおうわ」

で、千尋は雪乃を比企谷兄妹の所に連れてきた。

「と、いうわけで、一緒に回るようになりました」

「まあ俺は別に構わねえけど」

「小町も大丈夫ですよー？雪乃さんと一緒にお出かけなんて、初めて嬉しいです」

仲間が1人増えた。

小動物コーナーと四人

四人でしばらく回っていると、小動物ゾーンに入った。ここはハムスターとかウサギとかフェレットとかを集めたゾーンで、ふれあいコーナーなるものがある。

「へえ……ふれあいコーナーかあ。八幡、行こうよ！」

「ん、おお」

千尋が元気良く指をさして、そのゾーンに足を踏み入れる。子供みたいにはしやぎながら、たまたま近くにいたフェレットに手を伸ばした。が、ちよこまかと逃げられた。

「……………」

そのまま表情も体も微動だにせずに固まっていると、小町がすかさずフォローに来た。

「だ、大丈夫ですよ千尋さん！動物は純粋なだけですから！」

なんのフォローにもなつてなかった。ちなみに、雪乃も小動物をこりこりもふもふしていたが、ひとしきり首をかしげると立ち上がった。求めていたものとはやはり違うらしい。

ちなみに八幡が近付くと、ちよこまか逃げる。それを見て千尋は八幡の肩に手を置いた。

「凹むことないよ」

「いや気にしてねえけど」

「私もだから」

「だから気にしてねえってば」

「大丈夫ですよー千尋さん。こっちこっち」

小町が明るく千尋の手を引いた。で、一匹のウサギの前で止まる。

「触ってみてくださいよ」

「じ、じゃあ……」

言われるがまま、千尋はそーっと手を伸ばす。指先がウサギのおデコに当たり、そのまま頭をナデナデした。逃げることなく、ウサギは千尋の指先の匂いを嗅ぐ。

「わっ……」

「ね？」

その様子を見ながら八幡は改めて嫌われてるのは自分だけだと認識してしまった。

「なあ小町、もう行こうぜ」

「えー。千尋さんようやく楽しめてきたところなのに……あ、お兄ちゃん先行ってていいよ。小町、もう少し遊んでく」

「そうか……。じゃ、早川。小町のこと頼むわ」

「うん」

言うと、八幡は先へ進もうとした。だが、その後ろにいつの間にか雪乃の姿がある。

「……おまえも行くの？」

「ええ。確か次の次が猫コーナーよね」

「お前どんだけ猫見たいんだよ……」

そんな会話をしながら二人は行った。一方、小町と千尋はさっきのうさぎを撫で回しながらお話ししていた。

「で、千尋さん。ずばり、兄のことどう思いますか？」

「へ？いきなり何？」

「いやー、なにせ兄が過去に話したことがある女性なんて二桁いかないものでして、気になったんですよ」

「うーん……どう、と言われてもなあ」

上を向いて考える千尋。

「箇条書き的に表すと、友達、助けてくれた人、隣人、部員、闇に落ちたサスケの目、アホ毛、捻くれ者……ってところかな？」

「ああ、大体わかりました。はい、ありがとうございます」

「何その反応!?!？」

「ちなみに、男性として見たらどうですか？」

「それは……恋人に考えたらってこと？」

「はい」

「うーん……どうだろう。でも楽しそうではあるよねー。ただ、」
「ただ？」

「なんか、それ以前に八幡つて誰とも付き合わ無さそうだなーつて。俺と一緒にいるとお前のクラスでの立場がくみたいな？」

「あー……確かにありそうですねそれ。お兄ちゃんはゴミイちゃんだからなあ。というか、意外とお兄ちゃんのことよく見てるんですね」「まあねー。私の数少ない男友達だからね。なんなら雪乃と結衣は数少ない女友達」

他の女優美子と姫菜と戸塚くんしかいない、と心の中で付け足した。男友達も同じようなもん。

「えっ……千尋さん、友達いないんですか？」

「えっ、うん。いや今は少しはいるけど……知らなかった？」

「はい……。てつきり、お兄ちゃん的に言うとりア充だと……」

「ううん。C組には友達いないよ。なんでか嫌われちゃうんだよねー」

ニコニコしながら重いことをいう千尋だった。すると、小町が真面目な顔で言った。

「お兄ちゃん……千尋さんをもらつてあげてください」

「なにいつてんの？」

結衣と千尋と相談事

その日の帰り道。千尋は八幡、小町とともに帰宅していた。

「いやー楽しかったねー。ありがとね誘ってくれて」

ニコツと八幡と小町に微笑みかける千尋。

「いえいえ、小町も楽しかったですよ」

結局、あのは雪乃八幡組と千尋小町組と別れて周ることになり、集合したのは出口となった。

「ねー、ここ意外とたくさん動物いたね」

「そうなんですよ。小町も最初来た時驚いたんですよー」

「まあ、うちの猫と会ったのもあそこだからな」

「え？あそこって買えるの？」

「ああ、小町が飼いたいと言ったから即決だったな」

「え？そうなの？」

「ああ、特にウチの親父は小町に激甘だからな」

「え、なんで？」

「……………察しろ」

「……………ごめん」

悲しげに目を伏せた。

×××

家に着いて、千尋が携帯を見ると、メールが来ていた。結衣からだ。

『明日暇』』

との事だ。

『暇だよ』

『なら、少し相談があるんだけど……………いいかな（？——？）』

「……………何その顔文字」

そう呟きながらも返信した。

『いいよ。何処に行くの？』

『駅前のスタバに13:00でいいかな?』

『はい。じゃあおやすみ』

『おやすみ() () : z z z z z z』

そんなわけで、明日は結衣とお出掛けである。

× × ×

翌日の13:00。千尋は駅前のスタバに行くと、何処かで見たことあるお団子髪が待機していた。

「お待たせく結衣」

「あ、ちーちゃん。やつはろー」

結衣の前にカップが置かれてるのを見て、千尋は「先になんか買って来ちゃうね」と言って、買いに行った。

戻ってから、結衣のお向かいの椅子に座る。

「どしたの? 相談って」

早速、本題をブチ込む千尋。それを聞いて、若干表情を変える結衣。言いにくいことなのか、中々話そうとしなかったが、ようやく口を開いた。

「実は、き。ヒツキーの事なんだけど……」

「恋の悩みって奴?」

「は、はあ?!?ち、ちがうし!ありえないし!……いや、ありえないってことはないんだけど……い、今は違うし!」

いつかその相談するんだ……と、心の中で思いながらも結衣の話に耳を傾けた。

「その……ヒツキーとゆきのんが付き合ってる、みたいな……」

「……………は?」

何言ってるの? みたいな顔をする千尋。

「ちーちゃんは、知ってるかな。東京わんにやんショー」

「あ、うん。知ってるよ。昨日、八幡と小町ちゃんと雪乃と行ったから」

「……………へ?き、昨日ちーちゃんもいたの?」

「え？うん。元々、八幡と小町ちゃんと私で行ってただけど、途中で雪乃とも会ったから四人で回ってただよ。途中で小町ちゃんと私
がふれあいコーナーで二人と別れたんだけどね」

「……………」

しばらく黙り込んだ後、カァーツと顔を赤くする結衣。それを見て、ニヤニヤ笑いながら千尋は言った。

「ふうーん？もしかして、八幡の事好きだったから早とちりしたんだ？」

「は、はあ？！？そんな……ヒツキーの事なんて好きじゃないし！」

「ふうーん？じゃあ、私、八幡の事平塚せんせーにプレゼントしちゃおっかなーなんて……」

「だ、ダメだよ！怒られるよ！ちーちゃんが！」

「……………」

カマの掛け方が下手くそな千尋であった。

「…………でも、良かった。悩みとか、無くなっちゃった。ありがとね、ちーちゃん」

結衣が微笑みながら千尋に言う。

「ううん。あ、じゃあ私も結衣に聞いていいかな？」

「ん？何？」

「最近、どうして部活に来ないの？」

どストレートに聞いた。もちろん、結衣の様に遠回りに探るということを知らないわけではない。ただ、遠回しに言っても結衣には通じないだろうと判断したのだ。

「それは……」

急に困ったように俯く結衣。

「…………八幡絡みで、だよね？」

「あー…………うん。まあ、ね」

「話してよ。最近、部活で雪乃元気なくてさ。結衣が来ないから」
「……………」

考えてるようだ。話すか話さないか。俯きながら飲み物を一口飲む結衣。千尋もそれを見ながら一口飲み物を飲んだ。

「実は、さ。高校の入学式の日だね。あたしの犬をヒッキーが助けて、くれたの。だけど、ヒッキーはそれで車に跳ねられて、骨折しちゃってさ……。そのことであたしがヒッキーに気を使ってるって思われてるみたいで……」

「うわー……」

八幡ならそう考えそー……的な顔をする千尋。

「あたしはね、別にその事で気を使ってるわけでもないのに……」

「うんうん。分かるよ。結衣はただ八幡に一途なだけだもんね」

「だ、だから違うってばあ！」

「でも、いつまでも逃げてはられないんじゃない？」

「…………それは、分かってるけど……」

バツの悪そうな顔で結衣は俯いた。千尋は一度ため息をつくと言った。

「人の絆なんて簡単なものだよ。ひよんなことからすぐ簡単に崩れる、アレだ、ドミノみたいなものなんだよ」

自分の過去に経験があつたかのように千尋は続ける。

「でも、それは修復可能ってことだよ。ただし、逃げないで一から組み直せば、ね。今、結衣が八幡から逃げちゃうと、雪乃との縁も切れちゃうんじゃないの？」

「そ、そんなことないもん！」

「あるよ。『友達』になれたのは部活のお陰でしょ？その部活で出来た縁を切ってしまうえば、結衣と雪乃が会う機会なんてなくなる。クラスも違うしね」

「……………」

「いつまでも会わなくなると、その人の中の結衣はいずれ、『友達』から『友達だった人』になっちゃうんだよ。雪乃とも八幡とも、そうなる前に修復した方がいいんじゃない？」

あたしが言うと、結衣はしばらく考え込んだ後言った。

「……………うん」

「良かった。結衣には、私みたいになって欲しくないからね」

「……………え？」

「さて、この後どうする？せっかくだから、遊んで行く？」
「う、うん。じゃあとりあえず、何か買い物に行こっか」
二人は飲み物を飲み干すと、スタバを出てお出掛けした。

奉仕部と材木座とゲームと煽り

月曜日、部室には雪乃と千尋が二人でいた。放課後になって既に30分以上、雪乃が今日も由比ヶ浜さんは来ないのかしら……みたいな表情でいると、千尋がそれに言った。

「大丈夫だよ、雪乃。今日は来るから」

「早川さん……」

そう言った通り、ガラツとドアが開いた。八幡の後ろには、結衣の姿がある。

「や、やほー。ゆきのん……」

「いつまでもそんなところにいないで早く入りなさい。部活、始まつてるのよ」

家出した子供を迎える母ちゃんのような台詞を言った。

「う、うん……」

雪乃の隣に結衣が座る。その様子を見て、千尋はおもわず微笑んだ。八幡も椅子に座る。

誰も何も言わなかった。雪乃も結衣も八幡も誰かが話を切り出すとすると挙動は見逃すまいと、耳をすませていた。

緊張感が張り詰める中、千尋が口を開いた。

「いやー、聞いてよー。昨日、TSUTAYAでハリポタ借りてきてさあ、夜中までエキサイトしちゃったよー」

空気を読まなかった。すると、雪乃がそれに合わせるように言った。

「そ、そう。ハリポタ、というのは？」

「ハリー・ポッターの略だよ」

「あの、眼鏡の？」

「すごい覚え方してるね……。まあ合ってるけど」

「一度だけなら見たことはあるけれど」

「面白いから見たほうがいいよー。音声を英語で見れば勉強にもなるし」

「そうなの……」

「順番に見ないとわからないから……。あ、なら今度うちで一緒に見ようよ。もうすぐ夏休みだしさ」

「そうね。時間があれば是非ともそうしたいわね」

「結衣もどう?」

「へっ?!? あ、あたしも?!?」

「うん。どうせ結衣は暇でしょ?」

「どういう意味だっ?!? あ、あたしだって予定くらいあるもん!」

「ふうん? 例えばどんな?」

「ゆ、優美子と遊ぶし!」

「いつ? 何時? 何処で? 地球が何周回った時?」

「細か過ぎだし! てか、わかるわけないし!」

「小学生みたいなこと言ってるなよ……」

「ちなみに地球は今、約何周してるでしょうか」

「だから分かるわけ……!」

「地球の年齢を考えればわかるだろ」

「つまり、約46億周ね。まあ、他にも様々な説はあるみたいだけれど」

「なんで分かるの?!? 3人とも何者?!?」

そんな会話をしていると、いつの間にか3人とも普段と同じように話せてることに気付いた。この流れなら、キチンとお話しできるかもしれない。

そう思つて、口を開きかけた時だ。ダンダン! と焦ったようなノックが聞こえた。

「……………どうぞ」

仕方なさそうに雪乃が言うと、大慌てで材木座が入ってきた。

「うおーん! ハチえもーん!」

直後、心底イラツとした千尋は自分の椅子を持って殴り掛かろうとしたので、慌てて雪乃と結衣が止めた。

「アバダケ……!」

「待って! 落ち着いてちーちゃん!」

「由比ヶ浜さん、インカーセラス」

「ゆきのん本当はかなりハリポタ見たことあるでしょ!?!」

「全作一度ずつ見たことがあるのよ」

そんな一幕はともかく、八幡が材木座に対応する。

「なんだよ。つーかその呼び方やめろ」

「ハチえもん、聞いてよ! あいつらひどいんだよ!」

「悪いな材木座、この奉仕部は四人用なんだ。な、ジャイアン?」

「なぜ私を見るのかしら……」

怪訝そうな顔で八幡を睨む雪乃。それでも、材木座は八幡に声をかけ続ける。

「おい、待て八幡。ふざけている場合ではない。ハチえもんが気に入らぬのなら、忍者ハチトリくんでもいいから我の話を聞け」

「じゃあ、私達は四人全員ドラえもんになつてのび太が死ぬまで徹底教育するー」

「おーい、早川落ち着け」

八幡も静止に参加し、なんとか千尋を落ち着かせると、ようやく材木座の相談に入った。

「先日、我がゲームシナリオライターを目指していることは言ったな?」

「ラノなんとかじゃなかったっけ……」

結衣が小首を傾げた。

「ぬ……。うむ。話すと長くなるのだが、ラノベ作家は収入が安定しないのでやめた。やはり正社員がいいと思っただけ」

「みじけえ……。二言で終わったぞ」

「つか、なんで私と八幡の方しか見ないわけ? キモいんだけど」

「はっ、同類に何を言われても効かぬわ!」

「元だつて言ってるでしょ!?! あんたホントガチで戦争してやろうか!!?」

「落ち着いてちーちゃん!」

「これが落ち着けるかあ!!?」

うきやームキヤーとこれ以上無いレベルで錯乱してる千尋を無視

して、八幡は材木座と話を進めた。

「……………つまり、お前が売った喧嘩をなかったことにするか、お前が確実に勝てるものにしろと？そういうことか？」

「そうだ」

自信満々のその態度に、八幡はため息をつき、雪乃は頭痛に耐えるようにこめかみを押さえた。

「悪いが断る。今回は明らかにお前に原因があるだろ。刺される覚悟がないなら煽んな」

そう言つて、さっさと八幡はシャツアウトしようとする。だが、そうもいかなかった。

「ほふう、八幡は変わってしまったな。昔の貴様はもつと滾っていた。張り詰めた弓の震える切っ先によく似た横顔をしていたがな」

「裏声出すな。そんな横顔はしたことねえよ。……………何が言いたい？」

「はむん、奉仕部など片腹痛い。目の前の人間一人救えずになにが奉仕か。本当は救うことなどできぬのだろうか？綺麗事を並べ立てるだけでなく、行動で我に示してみろ！」

「あ、材木座、バカ……………」

直後、凍りついたような空気を感じた。八幡も材木座も恐る恐るそつちを見ると、氷の微笑で雪乃が言った。

「……………そう、では証明してあげましょう」

遊戯部に殴り込みに行くことになった。

雪乃とゲームと千尋と荒れ

遊戯部部室前。

「で、こいつら全員殴り殺せばそのデヴ殺しても良いんだよね？」

「おい、さつきから早川の荒み方ハンパないんだけど。誰かなんとかしてくれ」

「いつそ、今彼を早川さんが殺せば依頼も消えて一石二鳥なのだけれどね……」

「おい雪ノ下、怖いこと言うなよ……」

「だってさー、せつかくさー、重たい空気和らげてさあー、みんなノリが軽くなつてさー、全部解決すると思つたらさー、あのクソたぬき……」

大きく千尋はため息をついた。

「なんだ、お前でも空気重いつて感じることもあるのか」

「そりやあるよ。でもその空気に流されるのは嫌いだからさ。何かしないと始まらないじゃん」

「ちーちゃん……ちーちゃん！」

「結衣ー！」

感動しました！みたいな感じで結衣と千尋は抱き合った。

八幡がノックをすると、「はいー」と気だるげな声が返ってきた。扉を開ける。中はうず高く積まれた箱、本、パッケージがあった。

「はあ？ここユーギ部じゃないの？なんかゲームつぽくない」

「そうかしら？私はこちらの方がしっくりくるけれど。由比ヶ浜さんがイメージしてるのはピコピコの方よね」

「ピコピコってwww雪乃可愛い！お婆ちゃんみたい！」

「ツ……！だ、だってピコピコ言うじゃない……！」

「ピコピコwww言い方可愛い」

「その辺でやめとけよ早川。PKPKPKされるぞ」

「八幡はどんなゲームやるの？」

「あ？俺は……まあ、一人でやるゲームだな。ドラクエとか」

「ラブプラスとか？」

「あーそうそ……いややらねえから」

「いや遅いから。一回バラしたから今」

「ちーちゃんはどんなゲームやるの？」

「私？アプリだとパズドラとか白猫とかシャドウバースとか……それ以外だとジージェネとか艦これとか……最近はps2とか」

「何、お前ボッチの癖にオンゲやってんの？」

「分かってないなあ。オンゲでの協力プレイ中の仲間は体育のチームメイトよりよっぽど信頼できるよ。死んでも蘇生してくれるし、全体にパワーアップ魔法みたいな掛けてくれるし。何より、共通の目的を持つてるから裏切るとか無いしね」

「なるほど……」

そんな話をしていると、雪乃が呆れたようにため息をついた。

「ゲームね……私には理解できそうにないわ」

「そうでもないって。確か、パンさんのゲームとかも出てるぞ」

「へ？パンさん？どしたん急に？」

「へ？あーいやそれは……」

雪乃がパンさん好きなことを話そうとした直後、雪乃が割り込んだ。
だ。

「比企谷くん、何の話をしているの？」

「はあ？お前何って」

「比企谷くんの言うことはよく分からないわね……だから、後で詳しく」
く

目がマジだった。どうやら、周りにはあまり知られたくないらしい。
い。

で、いい加減話を進めるために、雪乃は話題をそらした。

「ところで、部員はどこにいるのかしら」

「あー確かに、さつき声はしたのにな」

「ふむう、積みゲーや積読は最も多く時間を過ごす場所ほど高く積まれる。ゆえに、一番高いところを目指せばおのずと居場所はわかる」
「おお、材木座、すげえな。でもそういういいことはせつかくだから俺

以外にもちやんと言おうぜ」

そこを注意しておきつつ、材木座のアドバイス通り一番高く積み重ねられているタワーを目指した。すると、本や箱が邪魔で見えないが、確かに声が聞こえてきた。男子が二人、そこにいる。

「邪魔して悪い。ちよつと話があんだけど」

八幡がそう言うと、遊戯部の二人はコクツと頷き返した。

すると、材木座がとあることに気付いた。

「む、貴様ら一年坊主か！」

相手が年下と分かるといいなや、材木座の態度はすぐに大きくなった。

「おい、お前ら。材木座さんになめたクチ聞いたみたいじゃねえか。いいぞ、もつと言つてやれ」

「言うどころかサンドバックにしていいから。格ゲーじゃなくてリアルで」

「あ、あれー？ハチえもん!? サウザンド・ウィツ……」

直後、本気で殺しに掛かった千尋を雪乃と結衣がなんとか止めた。このやり取り何回目だよ。

「あー。君らこの男に用あんだよな？」

八幡がそう言うと、材木座がずいっと前に出た。

「ふはははは！ 久しいな。昨日は随分と大きな口を叩いてくれたが、いまさら後悔しても遅いぞ！ 人生の先輩として、そして高校の先輩として我が灸をすえてやろう！」

「……おい、さつき話してたのつてこの人？ うはー痛え」

「だろ？ マジないよな」

ぷつくすくす、とでも言うべき嘲笑に材木座が動揺するが、一々八幡は反応しなかった。

「俺ら奉仕部つつー、要はお悩み相談室なんだけど、材木座が君らともめたっていうからその解決に来たんだが……えーつと、もめたのはどっち？」

「あ、俺です。一年の秦野です。こっちは……」

「一年の相模です……」

「よし、じゃあ包丁なりなんなりでそのデブ好きなように刺してい
いから、私もそれに参加してもいいってことで手を打たない?」

「はっ……?」

「早川、今日はお前はマジで黙っててくれ」

冗談抜きで荒れるに荒れている早川を黙らせると、八幡は続けた。
「で、こいつとゲームで対決するって話なんだけども、君、格ゲー強い
んだろ?それだとやる前から勝負見えてるし、他のことにしないか
?」

我ながらむちゃくちゃな提案をしているとは思ったが、そういう依
頼なのだから仕方ない。

「んな、まだるっこしいことしないでよお、君達はバズーカなりマシン
ガンなり何でも持っていいから、あいつと殺し合いしてくれや」

「雪ノ下」

「早川さん、一度外に出ましよう?落ち着きましよう?」

そんなやり取りはともかく、八幡は交渉を続けた。

「せめて、他のゲームにするとか。こんだけあるんだし」

「それなら……まあ」

「いいですけど……」

「けど、変える以上何か見返りがないと……」

「じゃあ、材木座の土下座でいいか?負けたら責任持って【調子に乗っ
てすみません】って謝らせるから」

「え?俺が?」

「まあ、いいですけど……」

「じゃあ、やるゲームは任せる。あんま難しいのはやめてくれ。一見
さんにハードル高いゲームは新規が入れないから格ゲーと変わんな
くなる」

「なら……みんなが知ってるゲームをちよつとだけアレンジします」

「ふむ、して。そのゲームの名は?」

「ダブル大富豪ってゲームをやろうと思います」

言うつと、一年生二人は、眼鏡をくいつと上げた。